

かけがわ学力向上ものがたり  
—我が校のものがたり 実践編—



「茶のみやきんじろう」◦掛川市

令和4年2月  
掛川市教育委員会



## 「子どもたちの未来のために」

「ここがわからない。〇〇さん、教えて。」「これがこうだから、こうじゃん。どうかな?」「なるほど。わかった。」「あれ?じゃあここをこうしたらどうかな?」「あ、それもいいね。それでもいいじゃん。」

教室では、子どもたちが自分の考えを伝えたり友達の考えを聞いたりしながら、様々な問題を解決しようとして一生懸命取り組んでいます。そこには、一人一人の子どもの「ものがたり」があります。そして、そのものがたりを支える先生の「ものがたり」もあります。

掛川市教育委員会では、「学力」とは何かを、学校、家庭、地域で共通理解をし、どのようにしたら学力の向上が図れるか、その理念や方法等を「ものがたり」としてまとめた「かけがわ学力向上ものがたり」を策定しました。さらに、変化の激しい時代を生きる掛川市の子どもたちに付けたい「創像力」「創合力」「創律力」からなる未来を切り拓く3つの創る力を策定し、その育成に重点を置きました。

学校では、夢に向かって自ら考え自ら判断し、心豊かにたくましく生きる子どもの育成につながるよう、日々の実践の中で、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指しています。本年度も、児童生徒の学習状況に基づいた学校独自の特色ある「我が校のものがたり」を作成し、全教職員が共通理解のもと、3つの創る力育成への積極的な授業改善を進めてきました。

この度、本年度の「我が校のものがたり」による実践の中で、特に成果が表れた代表的な実践をまとめ、一冊の本にすることができました。各学校並びに、実践報告を提出していただいた先生方におかれましては、御多用の中、多大なる御協力をいただき、誠に感謝申し上げます。子どもたちの実態に応じた素晴らしい実践の数々から、子どもたちの充実した学びの姿が想像できます。

今後も、掛川の子どものための3つの創る力育成に向けて、学校、家庭・地域、教育委員会が連携して、子どもたちの未来のための教育活動の充実に努めてまいります。

# 目 次

日坂小学校 石野 拓也	1
G I G A スクール構想を生かし、主体的な学び合いのある授業を目指す	
東山口小学校 廣住 悠乃	3
「進んでかかわり 学び合う子」へ	
西山口小学校 杉浦 康加・曾根 幸南	5
アップとルーズを使ってみよう。・私のじまんの宝物を伝えよう！	
上内田小学校 松本 昌幸	7
タブレットを活用し、学びを充実させよう	
城北小学校 由井原 佑	9
D - C A P 精神で	
第一小学校 坂部 暢之	11
1人1台端末の効果的な活用をめざして	
第二小学校 石黒 幸志	13
根拠をもって判断し表現する掛二っ子	
中央小学校 岡本 慎也	15
子供中心の授業づくり ～5年生算数の実践を通して～	
曾我小学校 滝井 亜由美	17
自ら問いをもち、解決しようとする子の育成	
桜木小学校 平野 良直	19
どの子どもも学び続ける授業の創造	
和田岡小学校 櫻井 勇希	21
タブレット端末を効果的に授業に生かす	
原谷小学校 川隅 翔太	23
みんなで作る前向きG I G A スクール	
原田小学校 落合 碧	25
地域の方との関わりから学びを深める	
西郷小学校 小柳津 ゆき奈	27
自らが学び続ける授業を目指して	
倉真小学校 池田 勇太	29
「～たい」でいっぱい倉真っ子！	

土方小学校	田邊 智史	3 1
つながる学び		
佐束小学校	池田 紀子	3 3
自分から		
中小学校	中村 美由紀	3 5
考えを深めている姿とは		
大坂小学校	武士俣 文彦	3 7
学びで心の鐘をひびかせよう！「主体的に関わり合って 学びを深めていく子」の育成		
千浜小学校	富井 美帆	3 9
「主体的に学び合う子 ～ICTの効果的な活用を通して～」		
横須賀小学校	阿形 竜馬	4 1
話し合い活動を通して「できた」「わかった」を共有する授業		
大淵小学校	浅場 翔太郎	4 3
スーパーの秘密を探る ～コロナ禍での実践～		
柴川中学校	高橋 達也	4 5
学び合い やり抜く 柴中生		
東中学校	増田 有希	4 7
天気予報士になって、天気予報！？		
西中学校	横井 泰人	4 9
子どもが主役の授業 ～主体的に問題発見・解決していく力～		
桜が丘中学校	川中 瑞貴	5 1
学校教育目標の達成をめざすNIE教育		
原野谷中学校	池田 直茂	5 3
かしこい原中生を目指して		
北中学校	浦海 佐也佳	5 5
「令和の遠州の小僧」が集まってくる北中の学び舎		
城東中学校	研修推進委員会	5 7
iPad活用物語！ ～城東中の学びを全国へ～		
大浜中学校	池谷 貴弘	5 9
細胞による呼吸 ～意見を練り合う姿を目指して～		
大須賀中学校	森下 尚	6 1
「コロナ禍だからできること」「コロナ禍だけとできること」		

# GIGA スクール構想を生かし、主体的な学び合いのある授業を目指す

掛川市立日坂小学校 石野 拓也

東海道五十三次の25番目の宿場町として古くから開けた日坂宿。そんな宿場町に位置するのが開校149年目を迎える歴史深き日坂小学校です。

歴史ある町の学校である日坂小の子供たちが、GIGAスクール構想による一人一台端末を生かした最先端の学習に取り組みました。学びは最先端でありながら、自分たちの歴史ある町を表現し、その学びが広まっていく6年生の実践を紹介します。

## 主体的な学びにつなげるデジタルアートの活用～プログラミング的思考を育む学び～

子供たちの高い興味関心を持続させ、主体的な学びにつなげるため、一人一台端末を活用したデジタルアートを図画工作の授業に取り入れたいと考えていました。ある研修会で『Viscuit（ビスケット）』というアニメーション作成アプリがあることを担任の高林が知り、それを活用しようとしたのがこの学びの始まりです。

高林は、色や形、動きを組み合わせることで「動く模様」を作成できる機能を活用した単元を構想し、デジタルの良さを生かし、「作り・試し・作り直す」を繰り返して行くことで、子供たちの主体的な学びにつなげられると考え、「日坂・東山の歴史」を大きなテーマとした学習に取り組むこととしました。



学習の始めに、児童は基礎的な動かし方を習得しました。その後、子供たちが自ら発見した「形の動かし方」を一つの「技」として授業で紹介します。技には名前を付け、その技を学級で共有することで知識として習得させました。学んだ技によって、頭の中で動きの仕組みが整理され、組み合わせたり、新しい技を生み出したりするようになりました。形の動きや、重なり方を考えることで、主体的な学びにつなぎ、さらに子供たちのプログラミング的思考を育んでいったのです。

## 茶エンナーレへの参加で、「主体性や作品の質に変化」をもたらす～社会とつながる学び～

「日坂・東山の歴史」を大きなテーマをもとにして、子供たちが「日坂東山らしさ」を表現するために「自然・祭り・ほっこり」の三つの小テーマを決め、作品を制作しました。子供たちは作品に想いを膨らませ、どう表現したら日坂・東山らしさを伝えられるかをじっくり考えていきました。

さらに、作品を披露する場に地域で開催される「茶エンナーレ」を活用することにしました。高林は、自分の作品を見せる対象を設定することで「主体性や作品の質の変化」が大きくなると考えたのです。自分の思いをどのような色や形で表現し、それをどう動かして表現すれば見る人に伝わるのか、子供たちは「自分の作品の質を上げよう」と主体的に取り組んでいきました。そして、単元の「鑑賞」の学習につながっていきました。

また、「茶エンナーレ」に参加しているアーティストと関わり、他の作品に触れ、普段出合わないであろう色や形、発想に気付く機会をつくりました。



**39 デジタルアート～大好き日坂・東山**

- 開催日程 学校ホームページをご覧ください
- 会場 川坂屋
- 住所 掛川市日坂149
- 出展者 掛川市立日坂小学校

日坂・東山らしさをデジタルアートで表現します。日坂・東山には豊かな自然、お茶畑、歴史ある建物、お祭りなど素晴らしい環境が整っています。地元が大好きな子どもたちが、日坂・東山を「色・形・動き」を組み合わせた模様で表します。また、日坂屋を歩いて、作品を紹介する場所をみんなで探しました。当日は、14人の作品をつなげて1つの作品にして発表します。たくさんの方々に、日坂・東山らしさを伝え、関心をもっていただけたら嬉しいです。



## 見方・考え方・表現を深める鑑賞～対話で深まる学び～

単元の始めは、自分の想いを十分に膨らめ、制作時間を確保するために、あえて友達とは関わらずに個人で制作をしました。単元の間で、友達の見方・考え方を知り、自分の見方・考え方を深めるために、違うテーマと同じテーマのグループで鑑賞活動を2回取り入れました。違うテーマの鑑賞では、クイズ形式で作品を紹介し、作り手がどんな想いで何を伝えたいのかを考えました。作り手は、想いが伝わった表現とよく伝わらなかった表現を学びました。同じテーマの鑑賞では、同じ想いを表現しても、それぞれ表し方が違う点や使う色や形の共通点を学びました。また、子供たちはこの学習の対話から、想いを表すときに「動き」が重要であることや色を透化させると奥行きを表すことができることに気付きました。友達の作品や見方・考え方に多く触れることで、自分の制作への深い思考と新たな表現に繋がっていきました。こうした主体的な学び合いが、さらにプログラミング的思考の育成につながり、他の学習にその学びが広がっていきました。

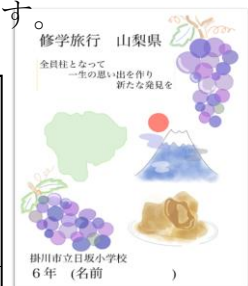


## 学びが広がる～発展的な学び～

図画工作の学習を通じた主体的な学び合いによって、プログラミング的思考を育んだ子供たちでしたが、その思考はスケッチブックという絵を描くアプリを活用したいろいろな学習に生かされました。下に示した写真の作品がその例です。外国語の授業で使った”Food chain”ポスター【下左】では、食物連鎖をイラストで表現しました。また、図画工作の学習では、クリスマスツリーの写真を背景にしてクリスマスリース【下中】を描きました。わずか2時間の授業で、色の濃さや薄さを考え、目立たせたい物は濃くはっきりと描き、背景は薄くし、色の濃淡や透過の機能を活用して、立体感がある作品に仕上げるほどに成長したのです。



6年生が
自主的に
作成した
修学旅行
のしおり
の表紙→



日坂小学校では、これからも地域の伝統や歴史を大切にしつつ、GIGAスクール構想による一人一台端末を生かした最先端の学習を進め、子供たちの主体的な学び合いを大切にしていきます。

## 「進んでかかわり 学び合う子」へ

掛川市立東山口小学校 廣住 悠乃

栄川学園では、学園共通の研究テーマ「進んでかかわり 学び合う子」に向け、各園・校で年齢や実態に合わせたサブテーマを設定し、それぞれがサブテーマを達成することで、12年間の一貫した学びの完成を目指しています。

東山口小では、「教科の見方・考え方を働かせて学び合う授業づくり」をサブテーマに設定し、(1)「内容ベースから資質・能力ベースの授業への転換」(2)「多様な教科で『見方・考え方』を働かせ、必要な資質・能力を身に付ける授業作り」という2点を柱として研究を進めてきました。

3年生と5年生の実践を通して、本校の授業の姿を紹介します。

### 私も描きたい！ (3年図工「わたしの6月の絵」)

T「これは何て言う題名の絵だと思う？」

C「雨みたいなものが描いてあるから、『梅雨』だと思う。」

C「青色を使っているから、『雲の上』だと思う。」

T「この絵は… (絵の説明を読む)」

T「この絵の題名は？」

C「『台風』だと思う。カタツムリが雨の日に出るし、雷は台風の時に特に出るように思った。太く描いてあることが印象的だった。雨より強い天気の日だと思う。」

～中略～

C「梅雨をテーマにした感じで、カタツムリと雨と紫陽花を描きたいな。」

T「みんなだったら、どんな題名で描きたい？ただの6月じゃなくて、私にとっての6月を描いてください。」

形や色の感じに着目しながら、絵の題名を当てる。自分も描きたいという思いが高まっている。

本単元の育成すべき資質・能力を、「表したいものを思いつき、自分の思いを色や形で表現すること」「作った作品に価値を見出すこと」と捉えました。そこで、感性や想像力を働かせ、対象や事象を形や色などの造形的な視点で捉えられるように、絵の題名を当てる活動を導入で行い、形や色の感じから、作者の意図を考えるようにしました。真っ暗な部屋の天井いっぱいに絵が映し出されると、子どもたちは、わくわくした様子で、これから始まる授業への期待感を高めていました。最初は雨など直接的なものに着目していましたが、次第に形や色の感じに着目していきました。映し出される絵や写真を見ながら、「自分だったら、～したい。」と、描く絵に思いを高めていきました。導入で得た6月のイメージを、絵を描く作業をしながらさらに広げ、どの子も自分なりの6月を表現することができました。





## 今日の自分はいい感じ！それは…（5年体育「跳び箱運動」）

本単元の育成すべき資質・能力を、「生涯に渡って運動に親しむことができるよう、自分にあった練習の仕方を知ること」や「他者との的確にアドバイスをし合うこと」と捉えました。

そこで、自分に合った場で練習できるように場の設定を工夫したり、ペアとの対話場面を意図的に設定したりしました。



C1 「視線が下を向いていたから、うまくいかなかったと思う。カメラを構えるから、それを見て跳んでみたら？」

C2 「それいいね。カメラを見てみるよ。」

友達の演技がよくなるように、動画をもとにアドバイスをし合いました。その結果、自分や友達の成長を感じられるようになり、「跳べた！」「本当上手！」「ナイスアドバイス！」など、温かな声かけが増えました。

授業のふり返りでは、



C 「〇〇さんのアドバイスで、つま先が赤い線から黄色い線になりました。（以前よりつま先の置く位置がよくなった。）昼休みも練習したいです。」

C 「たて2段に挑戦して、足が少しずつ前になってきました。いつか跳びたいです。」

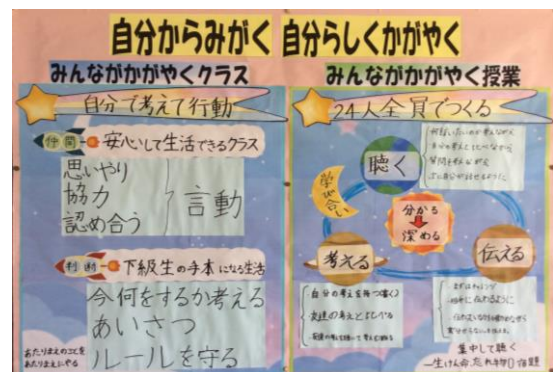
T 「他にも成長できたって人が多かったね。なんでだと思う？」

C 「アドバイスし合ったからだよ。」

といった話し合いが行われました。友達や教材と進んで関わる中で、子どもたちが自然と見方・考え方を働かせ、資質・能力を身に付けていくことができました。

## 子どもたち自身でPDCAサイクルを回す

年度初めに、「授業づくり」と「クラスづくり」の目標をクラスごとに立て、教室に掲示しています。また、目標に対して、学期ごとに中間評価と最終評価を行い、集会で他学年に発表することで、全校で共有しています。課題は次の学期に重点的に取り組み、評価したことを次に生かしています。子どもたち自身が目標をたて、実行し、評価し、次に生かしていくことで、「授業は自分たちでつくりあげるものだ。」という気持ち育っています。



## アップとルーズを使ってみよう。

掛川市立西山口小学校 杉浦 康加

学習への意欲が高く、やる気いっぱい元気いっぱいの4年生。国語の時間にも「今日は何をやるの?」「どんなことが書いてあるのかな。」と興味津々です。4年生最初の説明文「アップとルーズで伝える」では、内容をつかみ段落構成図を作っていこうと考えました。

### なぜアップとルーズ両方を使うの?

今日は4・5・6段落を読み取ります。

「アップって何?」「ルーズって何?」

「なんで両方使うの?」子どもたちの疑問を本文から探します。グループで話し合っ、ワークシートに書き込みます。グループでの話し合いはとても上手。自然と司会になる人、手を挙げて意見を言う人、まとめる人、役割を意識して進めます。

グループで協力してアップ、ルーズで分けること、分からないことをそれぞれ書き出した結果「テレビでは両方を使い分けている」と読み取ることができました。

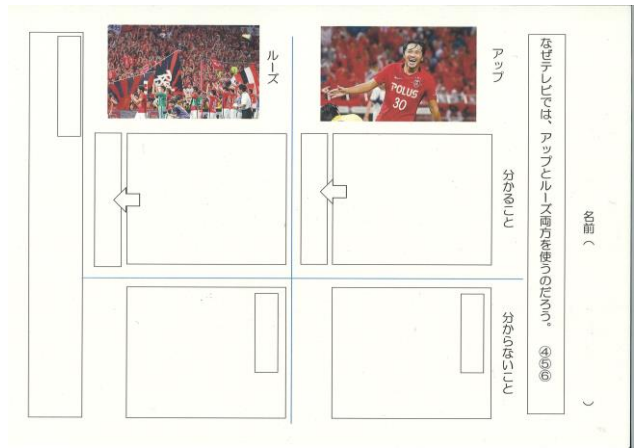
### 段落構成図を考えよう。

次は、段落どうしがどのような関係になっているのかグループで段落構成図を考えます。なぜその構成になるのか、証拠や理由も本文からしっかり見つけました。

作った段落構成図は写真に撮ってiPadに残します。少しずつ作った段落構成図を組み合わせ「アップとルーズで伝える」全体の段落構成図を完成させます。

### アップとルーズを使ってみよう!

国語での学習を通してアップとはルーズとは何か、どんなときに使うのか、どうやって使い分けるのかが分かった子どもたち。アップとルーズを実際を使ってみました。新聞で使う写真に。図工の作品紹介に。大きく全体を見せたい時はルーズを、細かい部分を見せたい時はアップを、写真を効果的に使うことができました。学んだことは色々な場面で使えることが分かり、今後の学習にも生かせそうです。



## 私のじまんの宝物を伝えよう！

掛川市立西山口小学校 曾根 幸南

明るくて活発な子どもたちも小学校生活6年目。仲のよい友達の知らない一面を知ることによってさらに仲が深まることを期待して授業に臨みました。外国語の授業では歌やチャンツ、カード交換ゲームで宝物の伝え方を身につけてきた子どもたち。学習してきた表現を使って、自分の宝物を伝える準備は万端です。

### どんな風に伝わっているのか撮影してもらおう！

宝物紹介に向けて、iPadを使って紹介の様子をペアで撮影しました。すると、「宝物のどこがお気に入りか伝えた方がいいんじゃない。」「もっと相手の目を見た方がいいよ。」「とアドバイスし合う子どもたち。子どもなりの視点で相手を思ってアドバイスすることができました。



### どうしたらもっと相手に伝わるのかな？

もらったアドバイスを基にどんな言い方にしようか真剣に考えていきます。「It's ~.」の文を使って、様子を付け加えてみようとする子。「Do you like ~?」の文を使って相手に質問してみようとする子。さらに宝物の魅力が伝わる表現にみるみるパワーアップしていきました。

### いざ本番！友達の宝物は何だろう？

本番ではタブレットの画像を見せながら紹介し合う子どもたち。ペアでのアドバイスの甲斐あってか、視線は友達。質問や付け足しをしながら自分の宝物について詳しく紹介していました。聞いている子からは、「Good smile・Good reaction・Good voice」の3 Goodの姿がたくさん見られる交流の場でした。

今回の学習で友達のまだ見ぬ一面を知ることができたようでした。この後の学習では自ら「付け加えてもいい？」「質問をいれてもいい？」と前向きに取り組む姿も見られました。

# タブレットを活用し、学びを充実させよう

掛川市立上内田小学校 松本 昌幸

## 1 1人一台タブレットが導入された

上内田小の学校目標は、「自分をひらく 未来をひらく」、この目標の実現のために、重点目標を「自ら・みんなと学びつづける子」として全職員で取り組んでいます。

本年度の大きな変化は、掛川市に1人一台タブレットが導入されたことです。上内田小でも、「まずは使ってみよう。」を合言葉に実践を積み重ねてきました。子どもたちは、どんどん扱いに慣れていきました。

## 2 児童も教師も積極的に活用する

(1) 4年生の音楽「めざせ！リズムの達人」の実践です。グループで協力をして、動物の様子を表現するリズムアンサンブルをつくる内容です。この授業の前に、職員で実際にアンサンブルをつくってみました。タブレットで録画したものをみんなで確認しながら、子どもたちの様子を想像することができました。

当日の授業では、グループで音楽づくりをする際に、1台はメトロノームとして、もう1台は録音用として活用しました。表現したいイメージに合うメトロノームの速度を設定して音楽づくりをすることができました。録音を再生して、「イメージとぴったり合ってきたね。」「もう少しゆったりとやってみよう。」など自分たちが納得のいくまでチャレンジしていました。



(2) 3年生の算数「かけ算の筆算」の実践です。初めて学習する  $23 \times 3$  を、習った方法を使って考えます。図で説明するために、アプリ「Jamboard」を使用しました。一人一人が自分のホワイトボードのように使用しました。お金を使ったり、ブロックを使ったりして、自分が選んだ解決方法で説明することができました。また、共有機能を活用して、席が離れている友達の考え方を見ることもできました。

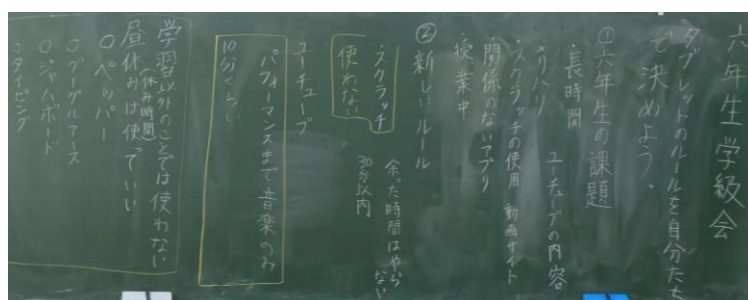
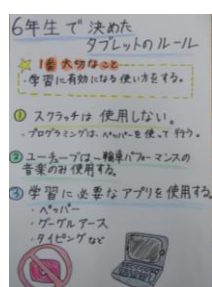
この実践を通して、3年生の子どもたちは、自分の考えを図で説明する力をつけました。また、自分の考えと友達のとを比べて、自分の考えをさらに再構成することができました。1人一台タブレットをおおいに活用できた実践でした。



### 3 「自ら・みんなと」使い方を決める

タブレットはとても便利ですが、使い方次第では、学習に集中できない恐れもあります。6年生では、自分たちから「タブレットの使い方のルールを見直したい。」という意見が出ました。まず、どんな使い方が望ましいか、みんなで確認しました。「学習や行事など、自分たちの成長のためにタブレットを活用する。」という意見にまとまりました。そして、新しいルールを決めていきました。自分たちの実態に即して具体的なルールを作りました。さらに、いろいろなアプリを禁止する提案が続きましたが、ある子がこのような発言をしました。「学習に必要なものは、使える環境にした方がいい。レポート作成などで調べるときに使用したい。」ルールというのは、禁止だけはありません。ルールは変更できます。今後このルールでやっていきながら、ルールの振り返りや見直しも行っていました。

今回のように大人が決めたルールに「従わせられる」のではなく、自分たちで決めることができたことに、6年生の大きな成長を感じました。



### 4 これからも試行錯誤を続けます

4月から、「まずは使ってみよう。」で上内田小の子どもも職員も、操作に慣れていくことができました。そして、活用していく中で出てきた問題を、自分たちで解決していこうする姿も見ることができました。

1年目は、とりあえずチャレンジしてみようという気持ちで、活用することができました。来年度は、より「効果的に」「有効に」学びを深める活用方法を研修していきたいと思えます。これからも、「わかった！できた！」と笑顔があふれる授業を目指していきたいと思えます。

## D-CAP 精神で

掛川市立城北小学校 由井原 佑

本年度、城北小学校では「学びが深まる授業～ICTの活用～」を研修テーマとして、学びが深まった子どもたちの姿をイメージしながら、授業を行ってきました。また、昨年度にiPadが一人一端末として導入され、本年度はiPadの本格的使用が始まったため“まずは使ってみよう!!”というD-CAP精神で研修を進めてきました。その様子を外国語科専科教員として活躍している金田教諭の授業を中心として、お伝えします。

### 教師間の絆がより強く

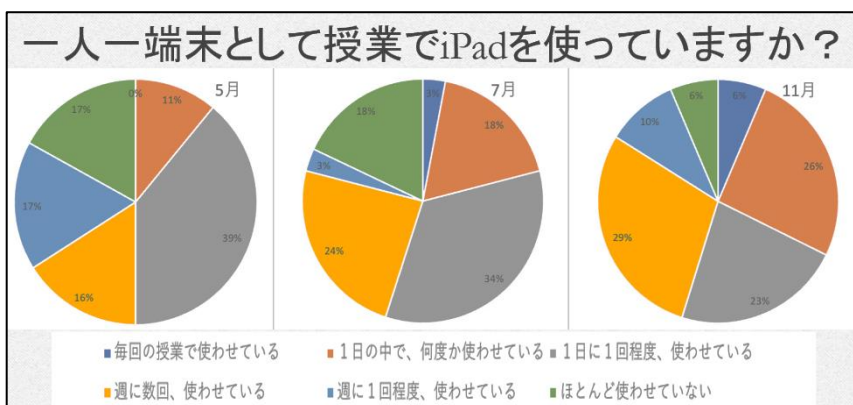
「授業のどこで、iPadを使ったら良いの?」「そもそもiPadで、何ができるの?」

「初めて、iPadを触った。ところで、どうやって、電源入れるの???」

そんな声が職員から上がる中、本校では4月と5月に計5回のICT研修を行いました。まずは、iPadの基本操作やログインの仕方から…、続いてClassroomの使い方や様々なアプリの紹介へ…、そして教員が児童役と教師役に分かれた模擬授業も行いました。



例年にはない研修、ただでさえ多忙な時期に行われた研修でしたが、若手とベテランがiPadを通して、積極的に関わり、授業について語り合う様子が職員室の至る所で見られるようになり、iPadの活用頻度も上がってきました。

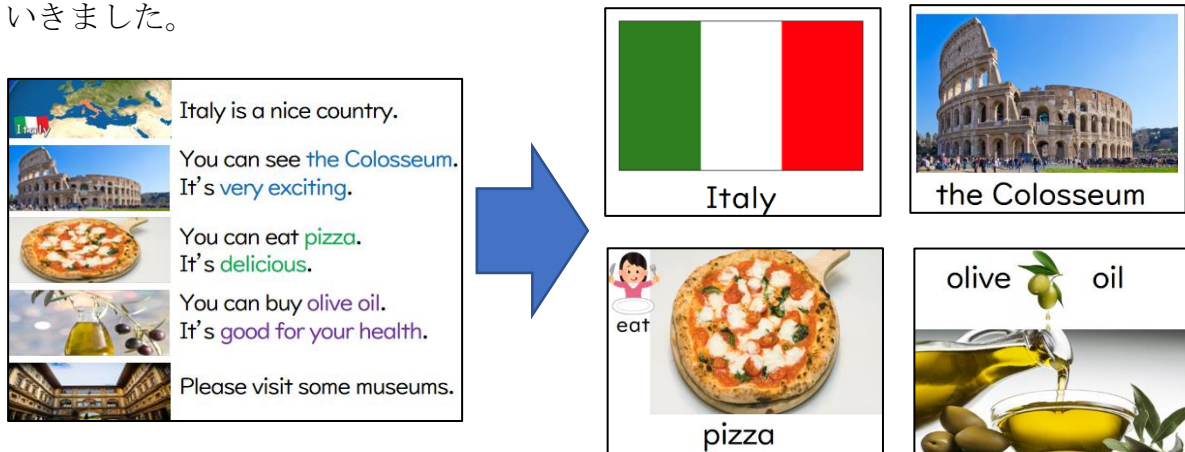


### 学びを深めるために…

授業は、6年生の外国語。興味のある国や地域について調べ、紹介し合う授業。調べ学習については総合的な学習の時間と横断的に行い、発表に使うiPad上のスライド作りは担任と連携しながら進めていくことにしました。

一人一つの国を調べ、紹介するのか、ペアで紹介し合うのか、グループ活動が良いのか、様々な学習形態を模索しながら、「学びを深めるため」に何が最善なのか追究していきました。そして、即興的なやりとりが自然と生まれるのではないかと考え、ペアで外国について紹介することにしました。子どもたちがやりとりをしながら外国について紹介する、より実践的なコミュニケーションになることを願って。

スライド作りでは、子どもたちも教師も苦慮しました。伝えたいものが多く、できるだけ情報を入れたくなってしまい、日本語や画像データをぎっしりとスライドに挿入していく子どもも出てきました。iPad を使ってコミュニケーションを取ることで、「外国語を用いた会話に対する戸惑いや抵抗を極力、軽減させたい」「積極的に外国語でのコミュニケーションをして欲しい」という思いとは裏腹に、外国語を使わなくても良い、むしろスライドを見せることで、外国の紹介ができてしまうようになってしまったのです。そこで、2種類のスライドを用意し、子どもたちに提示し、そのスライドの良い点や改善点を見つけさせました。すると、「え？じゃあ、このスライドも変えていかなきゃ!!」と気づき、自分たちのスライドに反映させていきました。



## いざ、「Let's go to ~ !!」

外国語では、Warming-up として、教師と子どもたちのやりとりからスタートしていきます。軽快なリズムの中、どんどんと進んでいく。外国語での会話に抵抗があるとは感じられないほどスムーズでした。

そして、子どもたちが外国について紹介し合う時間です。最初は、不安そうに原稿や iPad を見ながら、紹介していた子どもたちも、だんだんと表情が柔らかくなっていきました。紹介が終わるたびに、「ここで、buy(買う)も使えるよね。」「相手を見なきゃ伝わらないよね。」と、自分たちで考え、修正をしてく姿が、どのペアでも見られました。



自分の伝えたかった英語をどうしたら表現できるのか、みんなで考える時間では「地球儀」を「Earth ball」と言い換え、どうにかして外国語でのコミュニケーションを取ろうとする主体的な子どもたちの様子が見られました。

授業の後半では、身振りや手振りを加え、聞き手を意識して堂々と発表する姿、話し手の言葉にうなずいたり、質問をしたり姿などがあり、本当の意味でのコミュニケーションが取れていました。

今回のように、城北小学校では日々、学びを深める方法を研究し、新たな挑戦をしてきました。その頑張りを支えてくれていたのは、このような子どもたちの姿だったように感じます。

# 1人1台端末の効果的な活用をめざして

掛川市立第一小学校 坂部 暢之

## 学校に iPad がやってきた！

「わー、iPadだ。家にある。」「初めて見るよ。どうやって使うの?」「何か家にあるのと違う。キーボードが付いている。」

4月から、市内の全ての小中学校に iPad が導入され、筆箱や教科書、ノートに加えて学習用具の1つに加わりました。iPad に対する反応は子どもによって全然違います。そして、それは教師も同じでした。自分の iPad を持っていてすでに授業に使っていた教師、スマートフォンを使っているのでもとなく使い方が分かる教師、初めて iPad を手にした教師と様々です。子どもにも教師にも個人差がある中で、どのように iPad を使っていくのかを考えるとところから研修がスタートしました。

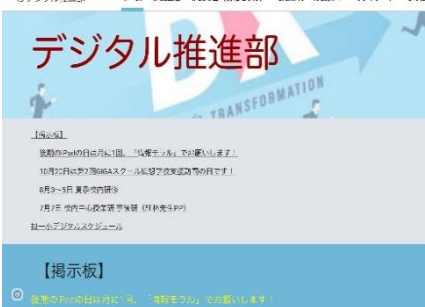


## まずは使って慣れるところから！～子どもも教師もチャレンジ!!～

「うまくいなくてもいいから、とにかく積極的に使っていこう!」を合言葉にして、授業でどんどん iPad を使っていくようにしました。しかし、教師にある程度の知識がないと子どもに指示が出せません。そこで本校では、「デジタル推進部」と呼ばれる iPad の管理や活用、授業でのアプリの使い方等に堪能な教師で組織した部を立ち上げました。そして、研修の時間や、時には放課後の時間を使って授業に生きる活用の仕方について研修をしました。また、iPad の機能やアプリの使い方の説明を分かりやすく示した「iPad 通信」を発行し、苦手な教師も積極的に使っていけるような環境を整えていきました。教師が研修したことはすぐに実践できるようにしたり、子ども達も iPad に慣れ親しんだりできるようにするために、毎週木曜日の朝活動を「iPad の日」として設定しました。

最初は、「今までプリントを配っていたけど、iPad で送ってみよう」や「まずはみんなで写真を撮ってみようか」など、学年会や教材研究をする中でアイデアを出し合っていました。夏休みが近づく頃には、「写真を撮ったんだけど、比較するのに便利なアプリってある?」や「話し合う場面で iPad を使ったら上手くできないかな?」などの会話が、学年の枠を超えて職員室で聞かれるようになっていきました。

デジタル推進部 ホーム iPad 講座 iPad の日 (情報モラル) OGAスクール訪問 ミラライド その他





「〇年生ではどこまでできるのか」「次の学年に向けて何ができるようになっていけばいいのか」「教師が使える自信がない」など、不安なことはたくさんありましたが、環境を整え子どもも教師もチャレンジする気持ちを大事にすることで研修を進めていくことができました。

## 子ども達自ら学びを深めるアイテムに～iPadで表現力アップ～

「先生、テレビにミラーリングをして説明していいですか?」「Twin Viewerで比べてみたんだけど・・・。」「この前の授業で勉強したことだよ・・・黒板を撮った写真あるから見て。」

夏休みが明けてしばらくすると、このような声が少しずつ聞こえるようになってきました。iPadに慣れてきた子どもやiPadに堪能な子どもが、教師が指示をしなくても自分達で考えてiPadを使う場面が出てきたのです。発表を聞いた子ども達は「おー、分かりやすい!!」「そうやって使えばいいの。」などの反応をして、中には自分の発表に生かす子どもも出てきました。

グループで話し合う中でも、「これってどうやればいいのか。」「こうするともっと見やすくなるよ。」など、子ども達同士で教え合い、iPadを使って分かりやすく説明しようとする姿が増えていきました。

iPadは学習用具の1つです。教師が指示した時だけに使うものではなく、子ども達自身が使いたい時、必要だと感じた時に使えるものになるようにしていきます。

## 更なる深い学びをめざして～効果的なiPadの活用とは～

本校では、自分の考えをつくる際、グループの形で向かい合い学び合いで学習を進めていきます。困ったときにはすぐに友達に相談できる環境をつくることで、自分の考えがもてず取り残されることを防ぐのです。自分だけが分かればそれでよいのではなく、みんなで分かるようになりたいという雰囲気があるからこそ、子ども達同士で教え合ったり、より分かりやすい発表にするためにiPadを使おうとしたりする姿が見られています。

今年度、「とにかくiPadを使うことにチャレンジ」で取り組んできた研修ですが、上手いかなかったことや使わない方がよかったと思うことも多々ありました。来年度は、学び合いの授業をさらによりよくするために1人1台端末の効果的な活用を研修していきます。そして、「3つの創力」が身に付くように、また、本校の学校教育目標である「夢・元気・思いやり」が授業の中でも育めるように、子ども達の「みんなで」「一生懸命」「できるようになりたい」という思いがあふれる授業をこれからも創っていきます。



# 根拠をもって判断し表現する掛二っ子

掛川市立第二小学校 石黒 幸志

掛二小では、「めあてに向かって高めよう自分を みんなで」の重点目標の下、掛二小の児童に付けたい力を「根拠をもって判断し表現する力」と設定しました。この付けたい力にどのように迫っていくか…「根拠」とは何か…を各教科の授業を通して考え抜いた一年間。ここでは、国語の授業における取組を中心に掛二っ子の姿とともに紹介します。

## 1 根拠を明確に、自分の考えに自信を

自分の考えをもつ時、そこには何かしらの根拠があります。その根拠が明確であれば、自分の考えに自信をもつことができ、「みんなに伝えてみたい。」「みんなの意見も聴いてみたい。」と思い、それが主体的で対話的な深い学びに繋がると考えました。これまでの学習で学んだことや、本文・資料に書かれていること、時には友達の考えが根拠になることも。これらのような根拠をもとに、判断し表現する力を育成するために、日々の授業研究、授業実践に取り組んでいます。

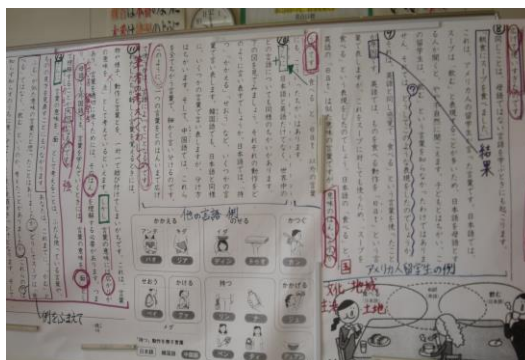
### 【授業例①】

4年生国語「本文を根拠にして、筆者の考えと具体例の関係を捉えて読もう。」の単元では、『アップとルーズで伝える』を教材文に学習を進めました。子どもたちは、「本文を根拠にして」という言葉を強く意識して、アップとルーズそれぞれのよい点と悪い点を見つけていきます。個人学習では、教科書の本文に線を引いたり、本文を引用して自分の考えをノートに書いたりする子の姿がありました。対話の場面では「○ページの△行目に～と書いてあるから、…」 「○○さんが言ったように…」等、叙述や友達の考えを根拠にした発言が多く聞かれました。本文の叙述を根拠にすることで自分の意見に自信をもち、友達の考えと比べたり繋げたりする子どもたちの姿を見ることができました。



### 【授業例②】

5年生国語「筆者に手紙を書くために、本文を根拠にして、要旨をまとめよう」の単元では、『言葉の意味が分かること』を教材文に学習を進めました。ここでも子どもたちは、「本文を根拠にして」という意識を強くもっています。個人学習で本文に線を引いた後、グループで一



つのワークシートの本文に線を引きます。「どこに線を引いた?」「根拠はどこかな…」等、グループ活動を通して個人で見つけた根拠に立ち返ります。くり返し出てくる言葉や接続詞などの言葉の意味や働き、文章全体の構成を根拠に考えを深めていく子どもたち。最後には、『言葉の意味が分かること』の要旨をすっきりまとめることができました。

## 2 各教科での根拠を発見!

国語の授業で根拠をもって判断し表現する子どもの姿を紹介しましたが、日々の授業研究、授業実践の中で各教科での「根拠」を発見することができました。どの教科でも根拠を明確にし、自分の考えに自信をもち、主体的で対話的な深い学びを目指していきたいと考えています。以下、本校で発見した各教科の根拠です。

国語	本文の叙述 言葉の意味・性質や働き 文章構成 筆者 題名 情景描写 挿絵 比較する 実体験 生活経験
算数	既習事項（前学年の系統性がある部分も含む） 友達の発言 数字 生活経験
社会	図、絵、写真、グラフ、インタビューなどの資料 既習事項 生活経験 見聞きした体験 社会的課題として把握している事象
理科	自分の生活経験 日常的な自然現象 実験結果 テレビやネットで見た映像 親から聞いたこと 友達の考え
保健 体育	(保健) 病気や怪我の予防 体の発育発達についての知識 (体育) 既習事項 見本の動画や画像 ICT等を使って撮影した自分の競技の姿 前時までにまとめた自己評価 自分のできている・できていないポイント 単元での自分の振り返り
図工	色や形の特徴 色や形の組み合わせ
音楽	音楽を形づくっている要素 歌詞の内容などの曲の特徴 自分の「こうしたい」という思い 生活とのつながり
家庭	今までの経験 家の人の知恵 調べ学習の結果
外国語	既習事項（単語や文） 自分の思いや考え 生活経験
生活 単元	児童の行動の表れの源 理由（なぜ、そのように行動したか なぜ、その活動に取り組んでいるのか等）

## 3 付けたい力を対話の中で高める

根拠を明確にすることで自分の考えに自信をもち、前向きに学習に取り組んできた掛二っ子。そこには、課題に向かって共に学習する友達があります。友達の考えを解釈し、友達の考えと比べたり繋げたりする対話を通して「根拠をもって判断し表現する力」を高めていきたいと考えています。対話の目的を明確にし、必然性のある対話を重ねて、「主体的で対話的な深い学び」の実現を目指していきます。

## 子供中心の授業づくり ～5年生算数の実践を通して～

掛川市立中央小学校 岡本 慎也

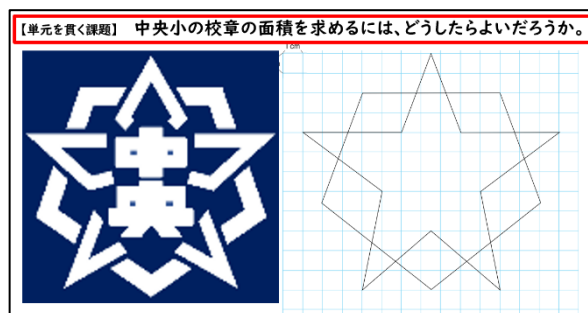
中央小学校では、「学びを深める子の育成～子供中心の授業づくりを通して～」を研修テーマとして、子供たちの「自分で答えをつくる」姿、「他者と考えながら関わり、自分の考えを少しずつ変える」姿、「学んだことから次の問いを生む」姿を目指して、日々授業に取り組んでいます。

### 単元を通して主体的に学ぶための単元デザイン

「先生、今日から新しい内容だよ。今度はどんな難しい問題？」  
新しい単元に入る際、子供たちからよく聞かれる言葉です。すぐには解けるはずのない難題に出会っても、どこか楽しそうに考えようとする姿が見られます。

教科ごとに各単元で身に付ける事項があり、単元を通してどんな子供に育てたいかを考えてデザインする必要があります。中央小では、従来のように1時間1時間につけたい力を身に付けるのではなく、単元全体で身に付けるという考え方で授業に取り組んでいます。単元全体の中に、「導入」「展開」「まとめ」があるのです。そのため、大胆に単元をデザインすることができます。

5年生の算数「図形の面積」の授業では、中央小の校章に着目しました。一人一人の見方で、三角形や平行四辺形等に分けることができ、新たに身に付けたい事項がたっぷり詰まっています。そして、「中央小の校章の面積を求めるには、どうしたらよいだろうか。」という単元



貫く課題を設定して単元をスタートしました。新しく学習する内容ですから、簡単に解けるはずのないこの課題が、子供たちの単元の学びのスタートであり、単元のゴールでもあるのです。「ここに線を引くと三角形になるよ。」「こうすると正方形になるから、この部分だけは求められるよ。」新たな難題に出会っても、子供たちは自らの既有知識を使って一生懸命考えようとします。「三角形や平行四辺形の面積はどう求めればいいのか…それを考えれば求められそうだな…」子供たちが自ら単元全体のゴールを見通して、主体的・対話的で深い学びにつなげていきます。

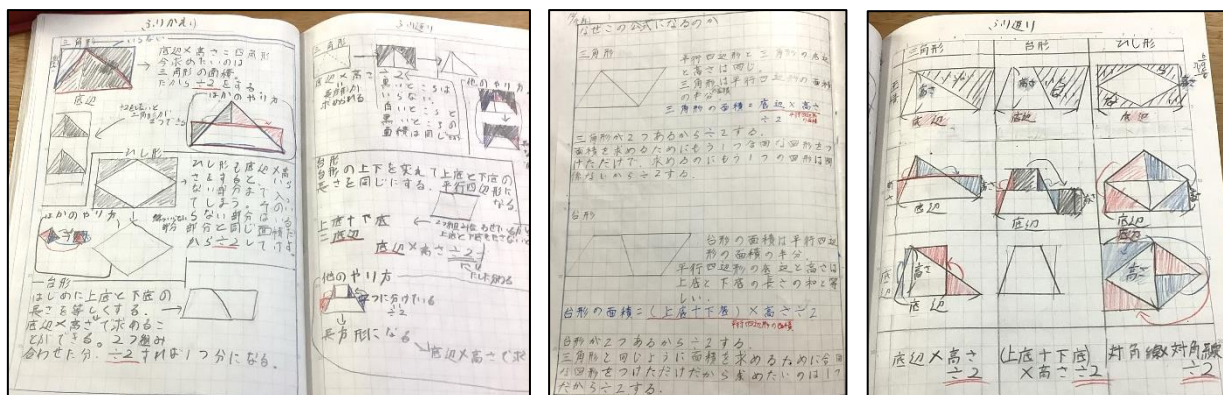
### 授業と家庭学習、家庭学習と授業を行き来させて思考を深化させる

従来、学校の授業では確実に教えて知識を身に付けさせ、家庭学習では得られた知識を反復練習してインプットさせることが当たり前の考え方でした。中央小では、子供中心の主体的な学びにつなげていくために、学校での学びと家庭での学びを反転させ、家庭学習によって身に付けてきた知識を学校の授業で活用したり、学校の授業で思考したことを家庭学習で振り返ったりすることを意識しています。たった45分間しかない授業時間の中で、友達と対話を繰り返す中で思考を深める時間

を確保し、さらにその授業の中で学びを振り返ろうとすると十分に考える時間もなく終わってしまいます。そこで思考がぶつ切りになり、十分に考えないまま次の授業を迎えることにつながってしまいます。

今回の単元では、特に、「授業での学びを家庭学習で振り返り、次の授業につなげること」を意識して取り組みました。単元前半で平行四辺形の面積の求め方や公式との結びつけ方について知識を獲得したあと、4時間にわたって、「三角形、台形、ひし形の面積が、それぞれの3つの公式で求められるのはどうしてなのか」考えさせる単元デザインをしました。子供たちは、平行四辺形の学習で獲得した知識を活用し、3つの公式の根拠を、授業での一人学びとともに家庭学習でも考えてきました。考えをもって授業に臨むので、授業開始2、3分ですぐに算数チームでの対話が始まりました。そして、子供中心に授業が進みます。友達の考えを聴き合ったり分からないことをぶついたりしながらチームで考えをつくり、様々なチームとの対話をして見方・考え方を広げる。そして、また自分のチームに戻り、考えを再考して深化させる。それを繰り返してたっぷり思考したあとは、家庭学習での振り返りです。家に帰って、もう一度今日の授業で自分がどこまで理解できているのか、自分は今どこがわからないのか、自分のペースでじっくりと好きなだけ振り返ることができます。

そして、次の日の授業。「昨日家でもう一度考えたんだけどね…」授業開始とともに、再び子供中心の主体的・対話的で深い学びのスタートです。



## 算数の授業が好き

今年度1年間、子供中心の授業づくりを目指して取り組んできました。中央小の5年生95人にとったアンケートでは、85%の子供たちが、算数の授業が「好き」「どちらかと言えば好き」と答えるなど、成果を生むことにもつながりました。

**「算数は苦手だけれど、算数チームで話して問題を解いたりするのが好き。」**

**「難しい問題を解けた時うれしい。みんなで一つの問題を解くのが面白い。」**

子供中心の授業づくりを通して、子供たちは、「授業は先生に教えてもらうものではなく、自分たちで考えるもの」という新たな学び方を得ることができました。子供たちが得たこの新しい学び方は、今後の人生における学び方にもつながっていくはずです。

## 自ら問いをもち、解決しようとする子の育成

掛川市立曾我小学校 滝井 亜由美

### 一人一台タブレット端末がやってきた！

GIGA スクール構想により、昨年度末、一人一台タブレット端末が配付されました。本格的な活用が始まった今年度。さあ、この端末をどう使っていこうか。職員の情報交換が始まりました。まずは、“使ってみる”ことからです。『自ら問いをもち、解決しようとする子の育成』に向けて、今年度は個人研修テーマを設定し、一人一台端末の活用も入れ込みながら個人での実践を積み重ねていきました。9月までは研究授業を行わず、各自の研修を進めていったので、他の先生の授業を気軽に見に行く“ぷらっと参観 week”を設定したり、校内研修での実践発表を通して情報交換をしたりして、互いの実践を共有していきました。



### 学校での学びに大活躍！

「合わせていくつかな。」ジャムボード(※1)に用意された丸図を実際に指で動かすことで、1年生はどの子も解き方を導き出せました。2年生の大きな数調べも、マークアップ(※2)を使って行います。間違えても何度も修正がきくのでどの子も諦めずに解決しようとする姿が見られました。音楽の器楽では、お手本動画を参考に、自分に合う速さに設定して繰り返し練習です。このように、動かしたり、何度も挑戦できたり、自分の課題に合う方法を見つけたりと、一台端末によって学校での学びが大きく変わっていきました。



### 家庭と教室がつながる！？ ～6年算数「体積」～

T:「この階段型の図形の体積は、公式で求められるだろうか。」

これは、授業の終末での教師の問いかけです。従来であれば学習課題の提示は授業の初めに行うのがスタンダードです。

T:「家庭学習で自分の考えを作ってください。」

と言って、授業が終わりました。

児童は家に帰り、家庭学習で出された課題と一人一人がじっくり向き合います。授業でやる場合と違って、制限時間がないので、自分が満足するまでじっくりと時間をかけて取り組むことができるのです。そして、次の日の授業が始まりました。

T:「この体積を考えてきたよね。どう？体積の公式、使えた？」

C:「まあ・・・」

C:「形を変えてみた！」

T:「自分のやってきたものを、小グループでジャムボードを見せ合いながら紹介していきましょう。」

もう自分の考えはできあがっているので、対話がすぐに始まりました。

C:「私は3等分して、一つ分の体積を  
まず出してから、×3をしました。」

C:「本当だ！できた！」

C:「×3か。面白いね。でもこれさ、  
『底面積×高さ』使っていないくない？」

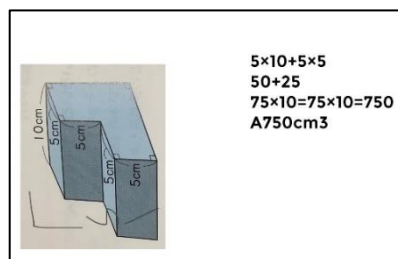
C:「底面積ってどこになるの？」

・・・などと、紹介し合う中で、本時の学習問題を解決しようと対話が進んでいきました。そして、各グループで出た意見を全体に紹介しました。その後、教師が意図的指名をします。

T:「他のやり方で解いたという子もいたと思うんだけど、〇〇さんは、どうやってやったの？」

C:「僕は、この立体の向きを変えて、下の部分の面積を出して、高さをかけるやり方  
をしました。」

さあ、なぜここで教師が意図的指名をすることができたのか。それは、タブレットによる家庭学習を行ってきたからです。教師と共有された状態でクラウド保存されているため、いつでもどこでも児童の考えを把握することが容易になりました。事前にどんなやり方を



してきたのかを把握できることで、授業で押さえない内容をしっかりと押さえながら、本時の目標に迫ることができました。そして、対話を通して深めた考えをもとに、練習問題にも取り組みました。

一人ではできない『対話』に授業の時間をたっぷり取れること、ひとりひとりが課題に向き合い、家庭でじっくり時間をかけて取り組むことができること、クラウド保存により、いつでも児童の学習が確認できることなど、反転的な学習(※3)のよさが明確になった実践でした。また、体育「跳び箱」や理科「実験方法」の動画を家庭で見て、翌日の授業につなげたり、体育の単元の振り返りを家庭でFormsを用いて行ったりと、“授業につながる学び”や“授業からつながる学び”で質の高い授業を実現することができました。

## これからも・・・

「先生、ジャムボードを使ってやってもいいですか。」「委員会のおたより、ドキュメント(※4)で作ってもいいですか。」そんな声が子どもから出てくるようになりました。これからの教育を見据えて、教師も子どももたくさんチャレンジした今年度。学校と家庭をつなぎ、友達同士の考えをつなぎ、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、今日も授業づくりに邁進します。

(※1) ホワイトボードアプリ、(※2) 写真等にペンやマーカーで書き込める機能、(※3) 家庭で学習内容を予習してから授業に臨み、

授業では他者との議論等に多くの時間を費やせるようにする学習方法。(※4) 文書作成アプリ

# どの子ども学び続ける授業の創造

掛川市立桜木小学校 平野 良直

## 「自分ごと」の学びに新たなアイテム

今年度、授業で大きく変わったことといえば、もちろんGIGAスクール構想のもと掛川市にも導入された1人1台タブレットでしょう。初めは手探りでしたが、「まずは、使ってみよう！」と様々な場面で使ってみました。驚いたことは、子どもたちの順応の早さです。私たちが教えることよりも、子どもたちが気づくスピードの方が遥かに早いです。新しい機能をどんどん見つけ出し、上手に活用しています。

走った日数が違う2人のうち、より記録がよいのはどちらかな？

こちらの授業は、まだタブレットが導入されたばかりの5月、5年生の授業です。「Jamboard」というアプリを活用し、平均の考え方をを使って問題を解いています。今までであればワークシートやホワイトボードを使っていましたが、タブレットを使用すると、「すぐ書ける」「すぐ消せる」「目立たせられる」など、便利なのがたくさんあります。子どもたちは、自分の考えをどんどん書き込んでいきました。そして、子どもたちは、自分の考えができると友達と交流を始め、考えを説明し合ったり、教え合ったりする姿がありました。そこにタブレットの目新しさはなく、学びのアイテムとしてしっかりと活用している姿がありました。



## 今までも、これからも大切な力

時代が変わっても、自分の考えに対して、根拠をもとに伝える力の大切さは変わりません。これは、6年生の国語『時計の時間と心の時間』（説明文）の授業です。6年生ともなると、文章が長く内容も難しくなります。この時間は、筆者の挙げる事例について、自分の経験をもとに考えています。



自分の経験をもとに、みんなが納得できる事例を考えよう。

この時間に扱う筆者の事例は、子どもたちにとって少し分かりづらい実験の結果が提示され、実験結果の説得力には大きな疑問が残るものでした。私たちは、「この事例から、子どもたちは、自分自身の経験から具体例を考えることができるだろうか？」と注目して見ていました。子どもたちは、自分の経験と重ね合わせながら一生懸命事例を考えていました。教材文に対しての興味・関心の高さが、学ぶ姿から見られました。子どもたちが事例を紹介し合う中で、「そうそう！」「同じ！」といった共通点を見つけ、話合いを楽しんでいました。何かの事象に出合ったとき、自分の経験と重ね合わせて考えたり、想像したりすることはとても重要です。この授業において、「具体例を考えることを通した自分ごとの学び」を経験できたことに大きな価値があり、このような積み重ねが、子どもたちの生きて働く力を育てていくのだと考えます。



## 新しい時代に必要とされる力を育てる

子どもたちが大人になる10年後の未来は、今よりさらに大きく変化していると考えられます。子どもたちは、私たち大人の経験や価値観とは違った時代を生きていくことになるでしょう。今まで人間が行っていたことは、どんどんコンピューターや機械に置き換わり、私たちは、より人間らしさが求められるようになります。

「人間にしかできない力」こそ、新しい時代に必要とされる力であると私たちは考えます。

今後、今まで以上に着目していきたいのが、「自ら学ぼうとする力」です。子どもたちが自ら問いを見つけ、今までに身に付けた力を活用して進んで解決する授業を、来年度は創造していきます。「今日の問題はこれです。」の一言で、進んで学び始める子どもたちを育てていけるよう、日々の授業づくりに取り組んでいきます。

# タブレット端末を効果的に授業に生かす

掛川市立和田岡小学校 櫻井 勇希

## 和田岡小のめざす学び

本校では、研修テーマを「主体的に学ぶ児童の育成」とし、GIGAスクール構想によって導入されたタブレット端末を授業で効果的に活用し、子どもの「わかった！」を引き出し、自ら進んで学習に向かう姿を育成できるのではないかと考え、研究の柱を「ICTを活用した対話の設定」として、一年間取り組んできました。

各学年の授業で見られた児童と教師のものがたりを紹介しながら、本校の取組をお伝えします。

## 「まず使ってみよう！」からのスタート

「ねえ、こうなったよ。」 「どうやったの？」

4月、6年生の国語の授業では、タブレットを使って取り組みました。使い出した頃の子どもたちは、集中してタブレットと向き合い、友達と情報交換しながら、ものすごい速さで、操作の技術を身に付けていくのです。

教師も、そんな子どもの姿に刺激されて、「まずは、私たちが使いこなそう！」と意識を高めました。教師同士で教え合い、研修の話し合いでも「使ってみよう！」という姿勢で、タブレットを日常的に使っていくようになっていきました。



## 児童も教師も、一歩ふみ出すチャレンジ

「あ、ここが大きくなってる！」

1年生の生活科の授業では、タブレットのカメラ機能を利用し、アサガオの成長の様子や、季節の移り変わりが分かるように、画像で記録を残していきました。昨年までと同様ワークシートも併用していますが、やはり、画像は分かりやすいようです。他にも、国語では、自分の話している姿を動画にとって見たり、体育では自分の実技を見てみたり、カメラ機能を有効に使って考えを深めていく様子が見られました。「もっと、タブレットを使って、子どもたち同士が考えを深めえるようにできないか？」 教師たちは、タブレットのよりよい使い方を探り、失敗をおそれず、新しい使い方にチャレンジをしていきました。



## タブレットと紙のハイブリット授業

「あ、並行だ！」

7月、4年生の算数の授業では、四角形を、平行な辺の組数によって、平行四辺形、台形、ひし形に分類する学習を行いました。四角形を仲間分けする場面では、タブレット上で四角形を動かして、分類することができるようになっていました。さらに、紙のワークシートも用意して、三角定規で本当に並行か確かめられるようにしました。

そして、自分で四角形の仲間分けを考えたら、タブレットのホワイトボードアプリ機能(Jamboard)を使って、友達と考えを話し合いました。「どうしてその分け方にしたの？」

「だって・・・」と話し合いが盛り上がり、タブレットを使って、子どもたち同士が考えを深めることが出来ました。

タブレットを使う授業が進んできて、効果的に使える場面とそうでない場面もあることを感じてきました。また、子どもから「タブレット使わないで、紙で考えよう」とつぶやいている姿も見られました。



## 誰もが授業に参加できるように

「一緒に演奏しようよ。私が先に弾くね。」

9月、3年生の音楽で、ラ・ド・レの3つの音を使って演奏しながら、旋律づくりをするという授業を行いました。リコーダーの代わりに、タブレットの鍵盤機能を使いました。それは、リコーダー演奏技能が十分でない子どもでも、本授業のねらいである旋律づくりを楽しめるようにするためです。

紙のワークシートも用意して、タブレットと合わせて効果的に使えるようにしました。

全員が同じスタートラインに立って学びを深められるように、タブレットの機能を活用できたと感じます。

今後も和田岡小では、タブレットの活用スキルをさらに伸ばすとともに、児童の好奇心を高めるような学習課題を設定し、より一層児童が興味・関心をもち、進んで学習に向かう姿を追求していきます。



# みんなで作る前向きGIGAスクール

掛川市立原谷小学校 川隅 翔太

令和3年度、1人1台タブレットが全員に配布されました。本校では、教員も子どもたちも1人1台タブレットを前向きに使えるようになるため、校内研修に取り組み、授業を行ってきました。ここでは、本校の公開授業が行われるまでの様子や1人1台タブレット活用の様子を紹介していきます。

## 授業づくり

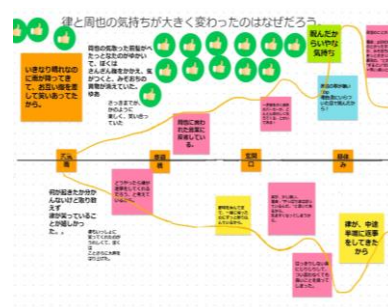
公開授業が行われる前に、授業の内容が適切か校内研修で検討します。今回の授業では、1人1台タブレットが使用されます。1人1台タブレットを子どもたち実際に使うことができるか、教員一同で試してみます。教員もまだ使い方に慣れていないため、互いに使い方を確認しながら授業について確認しています。この研修で、試したことをもとに6年生の授業を作り上げていきます。



## 6年生の公開授業

6年生の公開授業では、国語の授業を行いました。どの子も1人1台タブレットに向かって一生懸命に考えて自分の考えを記入しています。今まで鉛筆とノートを使って書いていたものが、1人1台タブレットに変わっても、さすが6年生。戸惑うことなく、すらすらと書くことができます。

自分の考えを書き終わった後には、アプリを使用して、考えを共有し合います。タブレットを使った話し合いは、普段より盛り上がりました。タブレット上に書いた考えは、紙に記入したものと違い、書いたものに色がついているため視覚的に分かりやすいようです。また、付箋のように自由に動かすことができるので、話し合いをするときにとても便利でした。

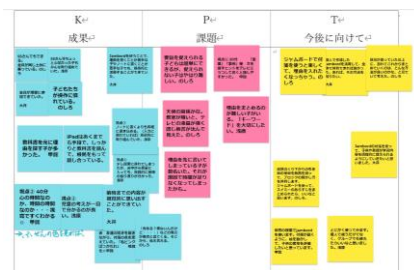


授業の最後に、クラス全体の意見を共有するのは、大型TVを使用します。タブレットを使えば、子どもが書いた意見は一瞬で大型TVに送られます。これまで、黒板に写していた時間も短縮され、その分、みんなでじっくりと話し合うことができました。



## 授業後の研修もタブレットで

公開授業の後には、教員で改めて振り返りの研修を行います。教員も子どもたちに負けじと、タブレットの付箋アプリを活用して取り組みました。タブレットを使った授業のよかったところやこれらから直していった方がいいところが次々と伝え合われます。教員も実際にタブレットを使いながら話し合うことでタブレットのよさがじわじわと伝わっていきました。研修が終わる頃には、教員からも「1人1台タブレットって結構便利だね。私のクラスでも使ってみよう！」といった声が聞こえてきます。みんなでタブレットを使うことで職員も前向きにタブレットを使った授業づくりができるようになりました。



## 前向きGIGAスクール

この公開授業のあと、本校では、1人1台タブレットの活用が進みました。本校で行われた代表的な実践をいくつか紹介します。1年生の生活科の授業では、お手伝いをした様子を撮影して、友達に報告しました。2年生の音楽の授業では、アプリを使って、リズムづくりをしました。3年生の社会の授業では、電子ホワイトボードを使用して、自分の町の地図を作成しました。4年生の理科の授業では、タブレットで夜空の写真を撮影して、月や星の動きを観察しました。5年生では、算数の授業で、計算ソフトを使って、平均を求める学習をしました。

どの学年でも、紹介した実践だけでなく、継続して1人1台タブレットを活用した実践に取り組みました。児童もどんどんタブレットの使用に慣れていき、学習に前向きになっていきました。その結果、本校で実施したアンケートでは「授業は分かりやすい」と答えた児童が97%、「学習したことが分かる」と答えた児童が92%となりました。1人1台タブレットを活用したことで、児童が学習に前向きに捉えられるようになったことがわかります。

来年度以降も、教員、児童共にタブレットを活用し、前向きに学習に取り組むことができる環境を整えていきたいと考えています。



## 地域の方との関わりから学びを深める

掛川市立原田小学校 落合 碧

全校児童55人。掛川市内で最も小さな小学校には、心強い応援団がいます。それは、いつも子どもたちを温かく見守ってくださる原田地区の方々。

そんな原田地区の皆様との様々な交流を通して、原田っ子たちはこの地区だからこそできる体験を積み重ね、学びを深めてきました。地域に飛び出して、生き生きと学んでいる子どもたちの姿を紹介します。

### はじまりの春 ～毎年恒例のいちご狩りへ～

原田地区の農家4軒からなる農業法人「多好喜（たすき）」様。毎年全校児童をいちご狩りに誘ってくださいます。多好喜の皆様が大切に育ててきたいちごを自分で摘み、思いっきり食べさせてもらった子どもたち。6年生は「農家」という職業に興味をもち、いろいろな職業について調べ始めました。5年生は「栽培」に興味をもち、実際にハウスでいちごを育てる作業を体験することにしました。



### 大人も学ぶ夏 ～教材開発に挑戦～

緊急事態宣言のため、子どもたちの活動はいろいろストップ。しかし、夏休みに今度は職員が地域の方と交流しました。講師としてお招きしたのは、原田小の隣で天然水を使用してレタスを栽培している「成神工業」の鈴木様。画材としてドライレタスの粉をどのように使えるか、職員みんなでアートに挑戦しました。



この時に職員が描いた作品が旭増寺（原田地区のお寺）に展示されました。

### 実りの秋 その1 ～6年生 佐次本マイスターの組子細工～

春から興味のある職業について調べてきた6年生。秋には原田地区の建具職人、佐次本木工の佐次本様から「建具職人」という職業について教えていただきました。全国建具展示会で内閣総理大臣賞を受賞した佐次本裕司様から、全国1位を獲得するまでの道のりについて教えてもらった子どもたちは、「自分も夢に向かって諦めないで努力をしたい」という気持ちを高めていました。組子細工やかんな削りにも挑戦し、原田地区の誇る職人の技に感動していました。



## 実りの秋 その2 ～5年生 ドライレタスプロジェクト～

春から、いちごや米の栽培について学んできた5年生。夏に職員がアトで使用した「ドライレタス」を作ることに挑戦しました。ドライレタスは食べることもできます。まずはドライレタスを試食して、多くの人に知ってもらいたいと考えました。そしてドライレタスを実際に作り、そのオリジナルレシピやマスコットキャラクター、商品名や広告を考えるプロジェクトチームを立ち上げました。成神工業の鈴木様にも御意見をいただき「原レタシー」というパッケージが完成しました。



## 深まる冬 ～地域から学んだことを大高山発表会で発信～

原田小の西には大高山がそびえています。その大高山に因んで、原田小では総合的な学習の時間（夢原里）で学んだことを発表する「大高山発表会」が毎年行われます。5年生は、自分たちが栽培や収穫に携わってきたレタスやいちご、米、椎茸などについてまとめたことを発表します。6年生は、職業や防災について調べたことを発表します。夏に自分たちが卒園した「こども広場あんり」で保育士の仕事について学び、保育士になりたいという夢を抱いて調べた子もいました。地域で学び、「もっと知りたい」と思ったことを一人一人がiPadを使って進んで調べる姿がたくさん見られました。

## 原田っ子を「キャッチワードを使って、思いを伝えられる子」に

原田小学校では、本年度「キャッチワードを使って、思いを伝えられる子」を目指して、学習活動を行ってきました。友達の見解につなげて自然に出てくる「だったら」「ってことは」「つまり」などの相手とキャッチボールをしているような言葉のことを原田小では「キャッチワード」と名付けました。このようなキャッチワードを使うことで思考を広げ、自分の思いを伝えられる発言力をもった子を増やしていこうと取り組んできました。

子どもたちは、温かい原田地区の皆様と関わる中で、学びの実感を重ねながら、主体的に学ぶことができました。掛川一小さい学校では、地域の方々の大きな応援を受けながら、素直で優しい子どもたちが様々な体験をし、日々りしく成長しています。今後も学校と地域が一緒になって子どもたちを育て、一人一人の学びを深めていきます。

# 自らが学び続ける授業を目指して

掛川市立西郷小学校 小柳津ゆき奈

西郷小学校では、子供たちが自ら学び続ける授業づくりを通して、「共にによりよく生きていこうとする子」の育成を目指してきました。

子供たちが、課題を自分ごととして捉え、自ら学び続ける授業にするには、どうしたらいいのでしょうか。3年生の理科の実践を通して、西郷小学校の取り組みを紹介します。

## 教師がぶれない授業を～授業のゴールを明確に～

3年生の理科「こん虫を調べよう」の授業。この単元で、この1時間の授業で、子供たちに身に付けさせたい力は何かを考え、「生き物が生活する場所と食べ物・隠れ場所との関係に気付かせたい。」というゴールを設定し、授業が進められています。

西郷小では、「西郷型指導案」を使って書くことで、つけたい力を明確にするようにしています。つけたい力をつけるためには、どんな展開、どんな手立てが必要かを常に意識しながら、授業を組み立てていきます。こうすることで、ぶれない授業、何を学んだのかが子供にも教師にも分かる授業を心掛けています。







## おもしろそう！考えたい！～導入の工夫～

「あ、これこの前の…」 「そういえばぼくも…」  
授業の最初に、前回の授業で行った虫探しの様子が、動画や写真で提示されました。興味津々の子供たち。前回の授業だけでなく、これまでの自分の体験も思い出しながら、たくさんつぶやきが出ます。これまでの学びを、短時間で思い出させ、今回の時間につないでいきます。

大切な授業の導入。短時間で子供達の興味・関心をぐっと引き込む工夫を考えています。「生き物はなぜそこで生活しているのだろうか。」という問いに対し、「え、なんで?」「知りたい!」「分かってたい!」そんな子供の思いが、自ら学び続ける力へとつながっていきます。



## 「えっ!だってさ…」!～思わずしゃべりたくなる切り返し～



セミのイラストを草むらの写真に重ねながら、「せみが草むらに住んでいたとしたら？」と教師が揺さぶります。一斉に「だめだめ！」の声。「だってさ…」と子供たちがその理由をつぶやき出しました。

授業の中で、教師が意図的に切り返すことで、子供の思考を揺さぶります。子供たちに「えっ。」と思わせることで、そこから新しい考えを作り出したり、自分の考えを確固たるものに変えたりして、考えを深めていきます。

## そうか!分かった!～ICTの活用～

どうして生き物によって生活している場所が違うのか、生き物を見てきた経験や観察結果から考えさせます。「バッタは分かるけど、セミは何でだろう。」観察結果から考えるだけでは、情報が足りないと考え、いろいろな生き物が実際に生活している様子を動画で提示しました。子供たちはそこから得た情報を元に、新たな考えを作り出してきました。



動画や写真の画面への提示を行うことで、子供たちの考えるヒントになり、理解を深めます。一人一台のタブレットを使って、写真や動画で記録に残し見直したり、調べ学習を行ったりもしています。こうしたICTの積極的な活用も、子供たちの「分かった!」につながっています。

## 来年度にむけて～子供同士で学び合う集団へ～

今年度西郷小では、自ら学び続ける授業作りを目指して取り組んできました。①子供たちにどんな力をつけたいのか、ねらいを明確にすること、②教師の切り返しによって子供達の思考をより活性化させ深めること、③ICTの活用により子供たちの興味・関心を高めたり視覚的支援で理解を深めたりすること、の3点について研修を深めてきました。

その一方で、今年度は子供たち同士を関わらせることが難しい1年でもありました。来年度は、より子供同士の対話や関わりを通して、問題を解決する楽しさや難しさ、やりがいを感じさせられる授業を目指したいと思います。

# 「～たい」でいっぱい倉真っ子！

掛川市立倉真小学校 池田 勇太

自然に溢れ、地域に愛されている倉真小学校。イノシシやカモシカ、キジなど、たくさんの生き物に出会うことができます。グラウンドには鹿の落とし物がコロコロと……。全校で58人と人数は少ないですが、いつも子どもたちの笑い声が学校中に響いています。授業では、「知りたい」「やってみたい」「解決したい」「話したい」「聞きたい」「教えたい」など、「～たい」でいっぱいの姿がたくさん見られました。

## 1年生 算数「くらべてみよう」

教師：「この赤鉛筆と青鉛筆ではどっちが長い？」

児童：「ちょっと分かんないな…(体を使って測る)あっ！赤だ！絶対、赤！」

教師が用意した実物に興味津々の1年生。(確かめたい。)(やってみたい。)(という思いが1時間の授業で溢れていました。夢中になって比べていく中で、長さを比べる時のポイントもしっかりと理解していました。授業の最後では、自分の持ち物と友達の持ち物を楽しそうに比べていました。

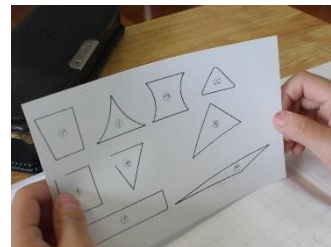


## 2年生 算数「三角形と四角形」

教師：「三角形？四角形？どちらでもない？何でかな？」

児童：「だって、ここを見て！この線が繋がってないから。」

9つの形を「三角形」「四角形」「どちらでもない」に仲間分けをする学習。考えの違いが生まれることで、相手の考えを聞きたくなり、自分の考えを伝えたくります。三角形、四角形の定義を理由に説明する姿が見られました。授業の終末、「これから超難しい問題をやるよ。」という投げ掛けに「できるー！」とやる気いっぱいの返事が返ってきました。



## 3年生 音楽「いろいろな音のひびきをかんとろう『まほうの音楽』」

教師：「どんな鳴らし方だと魔法が成功した感じになるかな。」

児童：「低い音から高い音にしていけば成功した感じになるんじゃないかな。」

いろんな楽器に触れ、どんな音が出るのかを楽しみました。教師は、「どんな感じがした？」と一人ひとりに声を掛けます。「ウィンドチャイムの優しい感じの音が好き。」「鈴のきれいな音が好き。」「ギロのガチャガチャしている音が好き。」とお気に入りの音を見つける子どもたち。この音を使って、どんな組み合わせにすれば、魔法が成功する音になるのか考えていきます。友達と音を合わせて、どんな音ができるのかワクワクした思いが生まれる授業でした。



## 4年生 体育「マット運動『KURAMI2021 オリンピック』」

教師：「どこを直せばいいかな。ポイントを見つけよう。」

児童：「どう？どこを直したら良さそう？」

「前からも撮ってみて！」

遅延再生アプリの「はなまるフォーム」を使って、子どもたちは班のメンバーの技をいろんな角度から撮影していました。動画を見ながら、「体はちゃんと丸まっているけど、足が…」などとそれぞれが見つけたポイントを伝え合いました。また、同時編集アプリのJamboardを使って、見つけた技のポイントを共有していました。体育授業でのICTの有効性を強く感じました。



## 5年生 社会「自動車の生産にはげむ人々」

教師：「自動車工場を建てるとしたらどこに建てるかな。」

児童：「工業が盛んだから私なら浜松市かな。」

「自分だったら自動車工場をどこに建てるのか。」その考えの根拠をもつために、実際に自動車工場がどのようなところに建てられているのかを「Google earth」を使って調べていきました。子どもたちは、2つの自動車工場の立地条件について、共通点や相違点を見事に見つけ出し、自動車工場に適した立地を考えることができました。社会の事象を「自分だったら」と自分事として考える姿はまさに主体的な学びの姿でした。



## 6年生 算数「分数どうしのかけ算の意味や仕方を考えよう」

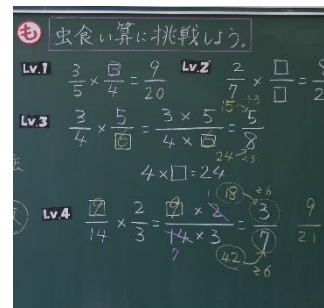
教師：「次はレベル3。この虫食い算です。解けるかな？」

児童：「燃えてきた！」

「先生！レベルはいくつまでありますか？」

「分かる！分かる！」

分数の計算に自信を付け、何でも解けると子どもたち。そこで、応用問題である虫食い算を出してみました。始めは、「簡単、簡単」とすらすら解いていきます。しかし、レベルが上がり、だんだんと難しくなっていくと、真剣に考え始め、近くの友達と相談し始めました。子どもたちは、分かりそうで分からない問題に夢中になって取り組みます。休み時間になっても「解きたい」と問題に挑戦し続ける姿が見られました。「できた！」「分かった！」と嬉しそうな声が教室に響きました。



# つながる学び

掛川市立土方小学校 田邊 智史

「高天神のおひざ元」にある土方小学校。全校児童 168 人は、「アクティブ、ポジティブ、クリエイティブ」を目標に、学習に運動に、今日も元気に活動をしています。

令和 3 年度、一人一台端末の環境が整い、学習が大きく変わりました。最上級生である 6 年生の取り組みを通して、土方小の子供たちががんばっている姿を紹介します。

## 「このままで大丈夫？」

5 月のある日。社会科の教科書に載っている「生まれた子供の数と、人口に占める 65 歳以上の高齢者の割合」のグラフを見て、子供から出た言葉です。少子高齢化が進む日本の状況を心配しての言葉でした。この時に見た資料は、日本全体のグラフ。心配していながらも、どこか遠い話のような気もしています。そこで、掛川市の様子はどのようになっているのかを考えることにしました。そこに、条件を付け加えます。

## 家でもつながる

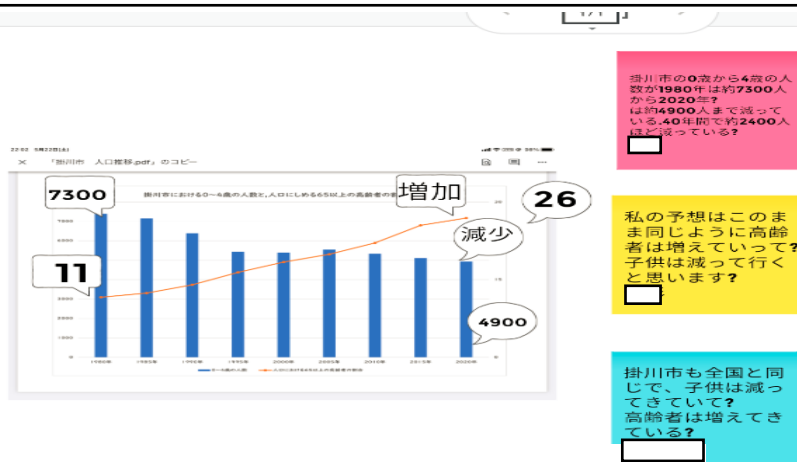
- 条件① 資料を読み取り自分の考えをつくるのは、家庭学習で行う。
- 条件② 自分の考えをつくったあと、班の仲間と共有し合い、考えをまとめるところまで家庭学習で行う。

ざわざわ。驚きと戸惑いで教室がざわつきます。無理ありません。これまでに①については行ったことがありましたが、②については経験がありません。教師からやり方が伝えられます。

- ・班で意見を交流するために、班ごとの Jamboard を使用する。
- ・Jamboard にある資料に、読み取ったことを書き込んで良い。
- ・また、考えたことをまとめる際には、内容ごと付箋で色分けをして分類する。

ざわざわ。教師がやり方を実際に提示しながら説明すると、またしてもざわつきます。しかし、声を良く聞いてみると先ほどのざわつきとは少し違います。

「Jamboard は使ったことがあるからできそうだね。」



(家庭学習で行った Jamboard 上の交流)

「じゃあ、16時にみんなで集合して（Jamboard上で）、一緒にやる？」  
「私、習い事があって遅くなるから、後から確認するね。」  
初めての試みに対しても、前向きに取り組む子供たちでした。

## 課題を自分たちの力でつくる

翌日。考えてきた意見を他の班に伝え合う活動からスタートです。事前に考えが作られ、班で共有させているため自信をもって伝え合うことができます。日本全体の様子と掛川市の様子を比べても共通することは、「少子高齢化が進み、人口減少が続いている」ということでした。そこから「この状態が続くと暮らしにどのような影響があるか」を考えます。



（考えてきた意見を伝え合う様子）

「子供が減るから、学校も少なくなるんじゃないかな。」  
「お年寄りが増えるから、介護する施設や人がたくさん必要になると思う。」  
「このままだと、働ける人が減っていってしまうから、食べ物などの生活に必要な物が減っていってしまう。」  
などの意見が出されます。と同時に、「私たちの力だけでは解決できないことが多い。」ことにも気づきます。私たちだけでは解決が難しいからこそ、「政治はどのような働きをしているのだろうか」と、これからの授業の中で考えていく課題が子供たちの中から生まれました。



（暮らしへの影響を考える様子）

## 学びをつなげる

授業の最後にふり返りを行います。「私は介護についてもっと調べたい。」「解決するためのお金が、どのくらいかかっているか調べたい。」など、これからの学習で一人一人が学びたいことをふり返りとして書きました。

この一時間で学びが終わるのではなく、自ら新たな課題を設定し、学校だけではなく家庭学習の中でも調べ考えをつくり、友達と協働し合い新たな価値をつくる。そのような学びをつなげていくサイクルを生み出していけるよう、子供たちは、今日も仲間と共に精一杯活動しています。

## 自分から

掛川市立佐東小学校 池田 紀子

本校は、「自分から まなんでいく子」を重点目標に教育活動を行っています。授業の中でも「自分から」動き出す、そんな子どもたちの姿を目指し、授業を仕組んできました。今日は、その実践を紹介します。

### みんながすっきりする授業にしたい！ ～ 3年あまりのあるわり算～

この日の問題は、

子どもが30人います。1個の長椅子に4人ずつ座っていきます。全員が座るには、長椅子は何個いるでしょうか。

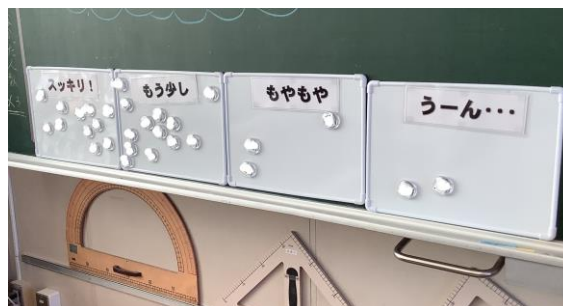
30÷4という式がすぐに出てきましたが、答えを求めたら・・・

「7あまり2だよ。」「え、8だよ。」「私は7こだと思う。」子どもたちの答えは、ばらばらでした。

「答えが3つあるなんて、おかしいよね。みんながすっきりできるように、みんなが学び合おう。」と教師が呼びかけると、子どもたちがバツと動き出しました。自分でブロックをもってきて考える子や、「〇〇さん、やろう！」と声をかけ自分の考えを説明する子、「〇〇さん、どう？」と友達に声をかける子。「自分が分かったからもう交流しなくてもいいや。」という雰囲気は、教室にはありませんでした。そんな子どもたちが、友達と関わる時に、参考としているのが「すっきりメーター」。

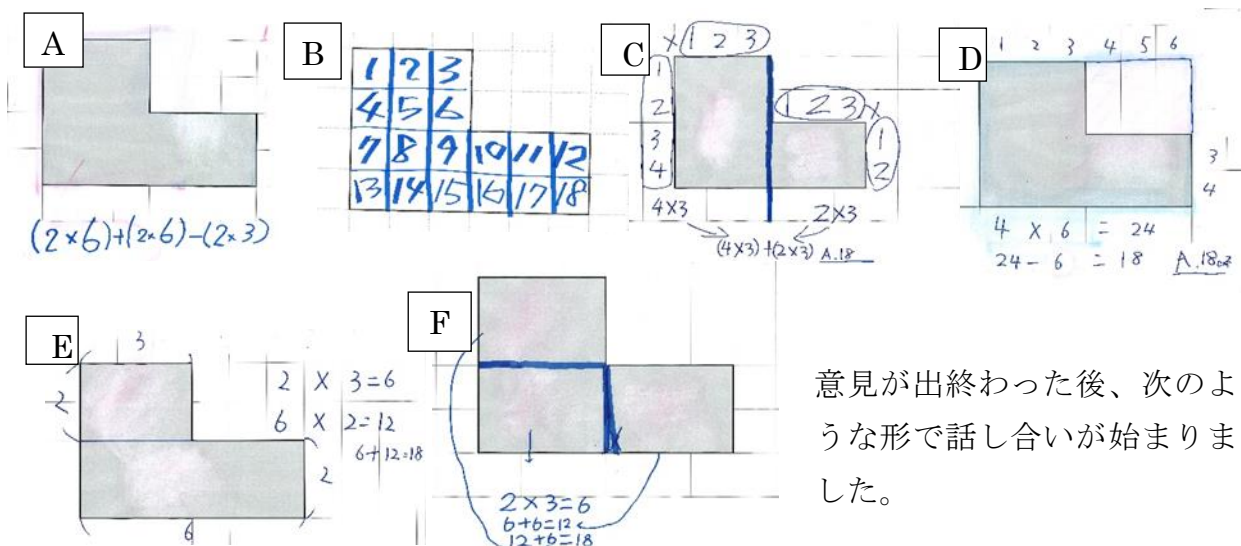
自分がこの課題に対して、どれくらい理解しているのか表すボードです。「すっきり」の子たちは、まだすっきりしていない子たちがどうしたら「すっきり」になるか、ブロックを使ったり、絵を描いたり試行錯誤して取り組んでいます。「もうちょっと」の子たちは、「すっきり」の子たちの意見を聞きたいと、聞きに行きます。

「みんなが協力して、みんなが分かった！とすっきりする授業にしたい！」という子どもたちの思いが伝わった授業でした。



### どこから考えよう？ ～ 4年 面積～

この日の問題は、複合図形の面積の求め方を考える授業でした。今までの学習を生かして、まずは一人で考え、その後自由に意見を交換する時間をとりました。子どもたちから出てきた意見は、次の6つ。



意見が出終わった後、次のような形で話し合いが始まりました。

T : では、6個の意見、何やっているか分かりますか？

S : Aは、何で $2 \times 6$ が2つもあるだ？（AとFがあまり分からない様子）

T : じゃあさ、分かりやすいのからいこうと思うんだけど、どれが一番分かりやすいかな？」

S : 「Bさんのやり方！」 →説明を始める。

T : 「次に分かりやすいのは、どれ？」

S : Cさんかなあ。

S : EさんかCさん。Aさんが、本当によく分からない。

T : じゃ、Cさんのやり方説明してくれる人？

『教師が、「〇〇さんから発表してください。」と、発表の順番を決めるのではなく、どこから説明するかは子どもたちが決める。』そうすることで、自然とそれぞれの考えを比べて似ているやり方を見つけたり、自分が分からないやり方が分かったりして、主体的な発言が増えていきました。最終的には、子どもたちからでた考えは、4つの方法に分類されていきました。教師が流れをつくる授業ではなく、子どもたちが、ああだ、こうだ言いながら、時には寄り道をしながら進めていく授業。子どもたちの表情はとても輝いていました。

## 一番大切なのは・・・

本校では研修を進めていく中で、「自分から」動き出す授業を実現していくために、「児童理解」が欠かせないということを再認識しました。「Aさんは、こういう考え方をすると思う。」「Bさんは、ここまでは分かりそうだけど、この後どうしていいか困ってしまうかも。」子どもたちの具体的な姿をイメージできると、授業での手立ても考えることができます。子どもたちはいろいろな学び方をします。私たちは、そんな子どもたちの姿を日頃からよく見とり、それを生かして、子どもたちが自分から学んでいく授業をこれからも目指していきます。

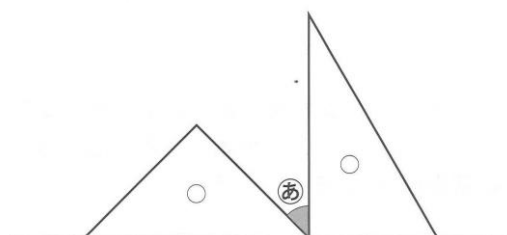
## 考えを深めている姿とは

掛川市立中小学校 中村 美由紀

学校が好きで、課題に真面目に取り組むことができる中小の子どもたち。わたしたちは、そんな子どもたちの「考えを深めている姿」とはどのような姿なのかをイメージして授業づくりをしてきました。また、考えを深めるための手立てとして、iPad を活用した活動にも取り組みました。その実践を紹介します。

### 便利な機能を使って説明

4年生算数「角」の授業です。最初に、「これ分かりそう？」と担任が2つの三角定規が並んだ形を示しました。三角定規の角度が分かっているのですぐに答えが返ってきます。やる気スイッチが入ったところで、スクリーンに別の図が・・・いきなりの問いかけに「えっ。」という声があがります。二つの三角定規が並んだ間にできた部分の角度を、分度器を使わずに求める問題です。



自分の考えをまとめたら、それをiPadで撮影し、友達と考えを説明し合います。画面上でメモをしながら説明するため、他の子に説明するときは、すぐに最初の画面に戻して説明を始めることができます。また、全体で考えを共有するときは、スクリーンに2つの考えを並べて示す機能を使い、考えを見比べます。直線や三角定規の角度に注目しながら意見をつなぎ、計算で角度を求めることができました。



iPadの便利な機能をうまく取り入れることで、視覚的に分かりやすく提示したり、共有化がスムーズにできたりすることをわたしたちも学びました。

### 「あれ？」から始まる

2年生算数「かけ算」の授業です。問題を読み、どんな計算になるかを考える活動に取り組む子どもたち。問題に合うように絵や図を描くことにも慣れ、「すぐ分かったよ。」「もう絵が描けちゃった。」と自信満々の様子。周りの友達がどんな式を書いているのか気になります。



そこで、恒例の「出張タイム」。2、3人のグループになって、説明が始まります。「これはさあ、 $8 \times 3$ だよな。」「8個ずつが3皿あるから、 $8 \times 3$ だよ。」と説明したり、「そうそう。私もそう思う。」と反応したりしています。

しばらくすると「あれ?」「そうかなあ。」という声が聞こえてきます。

A: 「問題はさ、『一人に3本ずつ』って書いてあるよ。だから、3が前になると思うけど。」

B: 「教科書見てみる?」

C: 「7人に鉛筆をあげるんだから、こうやって7人いて・・・」

(絵を指でなぞりながら説明)



また別のグループからは、こんな声か。

D: 「あれ?  $3 \times 7$ じゃないの?」

E: 「 $7 \times 3$ だよ。」

D: 「Eさんとぼくの絵は似ているんだけどなあ。なんで・・・」

F: 「ぼくも、 $3 \times 7$ だと思うんだけど。」



同じ問題なのに、式が違う。「あれ、どうして?」この疑問を解決するため、自然に対話が始まりました。Dさんは、近くにいる友達にも声を掛け、Eさんに何度も説明をしました。

授業の最後にEさんは「友達が何回も言ってくれて、間違いに気が付きました。」と振り返りました。

友達と自分の考えを比べることで「解決したい問い」を見つけ、対話の必然性が生まれました。子どもたち自身が対話のよさを感じられる場を設定することが、考えを深めることにつながると感じました。

わたしたちは考えを深めている姿について具体的にイメージし、その姿に迫るための手立てとして、対話をどのように取り入れたらよいかを考えてきました。これからも、子ども自身が対話したいと思ったり、対話のよさに気付いたりできるような働きかけについて考え、考えを深める授業を目指して取り組んでいきます。



学びで心の鐘をひびかせよう！



## 「主体的に関わり合って 学びを深めていく子」の育成

掛川市立大坂小学校 武士俣 文彦

### 主体的に関わり合う姿って！？ 学びを深める姿って！？

本校では、「主体的に関わり合って 学びを深めていく子」の育成を目指して、全教員が授業に取り組んでいます。主体的に関わり合う姿とは、学習の内容や活動を自分事として捉え、社会や生活と関連づけたり、友達と関わったりする姿です。学びを深めていく姿とは、友達と対話と繰り返しながら、様々な考え方に触れ、自らの問いや考えを変化させていく姿です。

「昨日の～さんの考え方を使えば、この問題は解けるのかもしれないな。」

「私はこう考えたのだけど、～さんは何でそう考えたの！？」

「違う問題でも、このやり方で解けるのかな。みんなで作ってみようよ。」

「AとBの考え方を合わせたら、Cの考え方もできるかもしれないよ！」

こんな言葉が子どもたちから出てくるように、授業を構想しています。

### 教師も子どもも、まずは使ってみよう！一人一台タブレット端末！！

今年度、掛川市の小学校に大きな変革がありました。一人一台、タブレット端末の導入です。「どのように使えば、効果的な使い方ができるのだろうか。」と、私たち教師も手探りの状態でのスタートでした。

失敗を恐れずに、教師も子どもも、まずは使ってみることから始まりました。普段はベテランの教師が若手の教師の相談に乗ることが多かった職員室でしたが、ICTの話題では全く逆の光景がみられました。若手の教師が積極的に活用し、その技術をベテランの教師に伝達していきました。

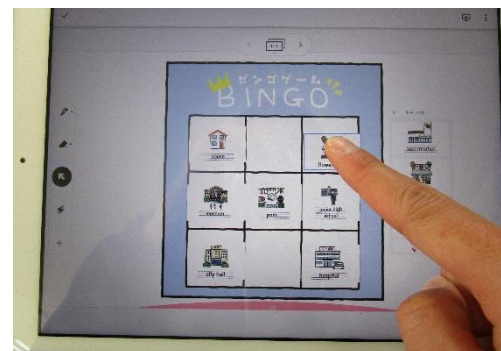
情報を共有し、全員が積極的に活用することで、その有効性や利便性がわかった1年となりました。



### ICTを活用した授業作り！

外国語の授業で、「建物」の名前を英語で聞き慣れしたり、言い慣れしたりする場面です。ジャムボードというアプリを使えば、簡単にオリジナルのビンゴカードを子どもたちに配付できます。

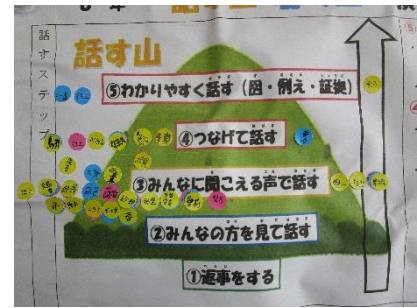
子どもたちは、英単語を自分の好きな位置に置いてビンゴカードを作ります。自分だけのビンゴカードを使った言い慣れの活動は、いつも以上に大きな声が教室に響いていました。教材と主体的に関わる姿が生まれていました。



## 「話す山」「聴く山」を使ってレベルアップ！

大坂小では、話す力や聴く力を高めるために「話す山・聴く山」のステップ一覧表をつくっています。

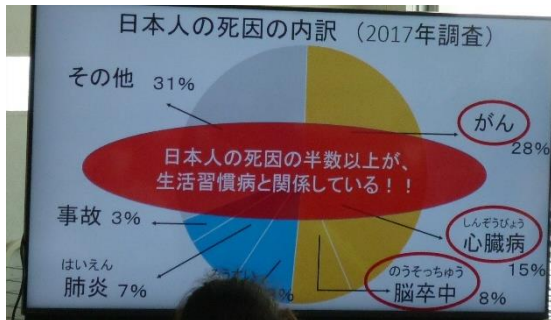
児童は、どの授業でもそのステップを意識しながら話し合い活動をし、クラスみんなで練り上げているのです。どの学級も対話を通して理解を深められるよう共通して取り組んでいます。



## 主体的に学ぶしかけ作り！

6年生「生活習慣病の予防」という保健の授業の様子です。

Aさんの一日の様子から、生活の問題点を考えてもらおうと資料を提示すると、「早寝、早起きはできているね！」「学校では全然運動していないけど、休日はどうしているんだろう？」「朝食がドーナツ2個では心配だね。」「このままだと病気になってしまうかも！」などと、子どもたちが次々と反応します。



そこで「生活習慣病」という言葉を提示し、生活習慣病とはどのような病気なのか学び、「Aさんを生活習慣病から救う方法」を、「毎日続けられそうなこと」という視点を与えてグループで話し合い、よりよい解決方法をみんなで考えていきました。

「毎日運動すればいいって言うのは簡単だけど、運動が嫌いだったら毎日続けられないよね。」  
「じゃあ犬を飼ったらどうかな。毎日の散歩なら続くんじゃない？」  
「油も砂糖も取り過ぎだから、ドーナツの量は減らすべきだよ。」



などなど、どのグループも主体的な関わりが自然と生まれ、「わかっちゃいるけど生活を改善できないAさんに、毎日少しずつできること」という視点で意欲的に考え、伝え合い、自分の生活習慣を見直すことができました。

# 「主体的に学び合う子

## ～ ICT の効果的な活用を通して～

掛川市立千浜小学校 富井 美帆

### 主体的に学び合うために

本校の研修主題は「主体的に学び合う子～ ICT の効果的な活用を通して～」です。自分事として課題を捉えて課題を作り出し、伝え合う活動を通して学びを深めることができる、そんな子どもたちの姿を目指しています。そこで本校では、① ICT を効果的に活用すること②中心発問や補助発問を工夫することの2つを柱として研修を進めています。では実際にどのような授業を行ってきたのか、本校の取り組みをお伝えします。

### ICT を使って繰り返し挑戦

4年1組で行った『リコーダーの旋律づくり』の授業。[「歌のにじ」の歌声に合う音を選び、リコーダーで旋律をつくらう]をめあてに今まで歌ってきた曲に合う音を選んで、リコーダーで旋律をつくります。でも、歌声に合う音を選ぶためには、どうしたらいいの？…



そこで、今回の授業ではiPadで主旋律を流しながら、曲に合う旋律をつくりました。昨年度までの授業であれば子どもたちがリコーダーだけを使用して、旋律をつくり、最後に主旋律と合わせてみるという方法でした。しかし、iPadを活用すると…子どもたちは「この音だと、最後が終わる感じにならないな。」「これは、曲の感じと合っていていいな。」「音をだんだん上がっていく感じにすると合わせやすいな。」「最後がドで終わるとしっくりくるぞ。」などと自分なりに主旋律を意識して旋律づくりをすることができました。iPadを活用することで、主旋律と合わせながら繰り返し自分の旋律が合うかどうかを試すことができるため、子どもたちが課題解決の意欲を高めながら主体的に学ぶことへとつながりました。

### 自分事として課題を捉えて意欲的に

3年1組で行ったのは国語の『すがたをかえる大豆』すがたをかえる大豆を学習した子どもたちが、次はそれぞれが自分で選んだ食べ物の「ひみつブック」を作っていきます。



「どんな順番にすれば、『中』の部分のわかりやすくなるだろうか。」 「すがたをかえる大豆の時には、工夫が簡単なものから難しいものに並んでいたけど、…自分の例文だったらどの順番がいいのだろうか？」と、自分事として課題を捉え、自分のひみつブックについて考えていきます。子どもたちは、友達に自分の例文の並びを説明する時には、自分の iPad に入っている本の写真を見せながら「プリンとアイスだとプリンは焼かなければならないから…」、「干物とツナ缶だと干物は、魚



の形が残っているから…」となぜその順番に並べるのかを分かりやすく説明することができました。また、友達の順番を聞いて、「それだったら〇〇より△△を先にした方がいいかな。」などアドバイスもできました。授業の最後には、「早くひみつブック書きたい。」という声が聞こえ、子どもたちの意欲的な姿が見られました。

## 前時までの学習を生かして

5年1組で行ったのは算数の図形の学習「五角形の和」の求め方です。子どもたちは、「三角形の時のように角を切って合わせたら…」と早速挑戦。「あれ、今までのように、角を切って合わせたらできないよ。…なぜ？」と五角形は $360^\circ$ より大きいから切って合わせることができないことに気づきます。そして、「 $360^\circ$ より大きいことはわかったけど、どうや



たら五角形は求められるのだろう。…」とみんな真剣。次第に、「五角形は、三角形と四角形に分けられると思うから…」と前時までにやった三角形の内角の和、四角形の内角の和を生かしながら次の方法を考え始め、様々な方法を使って五角形の角の和を求めることができました。

授業の最後には、今までの学習から「次は、六角形も考える？」と次の学習も見出しつなげていくことができました。

千浜小では、「主体的に学び合う子～ICTの効果的な活用を通して～」を目指して研修を行ってきました。今後も子どもたちが「やってみたい。」「次は、〇〇をやるのかな。」と自分事として課題を捉え、解決方法を作り出し、伝え合う活動を通して学びを深めることができるように、教職員が一丸となって教育活動に取り組んでいきます。

# 話し合い活動を通して

## 「できた」「わかった」を共有する授業

掛川市立横須賀小学校 阿形 竜馬

### 1 はじめに

横須賀小学校は今年で148年目を迎えます。自慢の校歌も明治44年に制定され、なんと107年も歌い継がれてきています。学校の正門には、わらじを差し出す「二宮金次郎像」があり、子供たちに「至誠」や「推譲」の心の大切さを伝えています。また、運動場にある“むくの木”は「掛川市の巨木・名木」にも入る木で、学校のシンボルになっています。

今年度の授業は子供たちが夢中になって考えたり、活動したりできるよう、先生達は学習課題の提示や学習問題の設定を工夫してきました。

### 2 実践

#### (1) 3年生の授業とICTの活用

##### ○授業 算数「円と球」

担任が段ボールに貼った円を渡し、「同じ大きさの円をコンパスで描きましょう。」と学習課題を投げかけました。しかし、渡された円には中心がないので半径が分からないと子供たちが答えました。定規で長さを測ろうとするも、どこを測ればいいのかわかりません。子供たちから「中心が分からないから、何cmに開けばいいか分からない」という言葉が出てきたので、『円の中心は、どうやったら見つけれられるのかな。』という学習問題を設定しました。子供の疑問を問題として設定したことで、話し合いが活発化しました。

##### ○ICTの活用 国語「山小屋で3日間すごすなら」

山小屋に行って自然とふれあう体験をするならば何をするかを班で決めたり、持っていく物を5つに絞ったりしました。その中で活動に必要なものを5つ考えること、それを選んだ理由をJamboardを活用して学習しました。Jamboardを使うことで、班の人の考えが一目で分かったり、同じ考えを集めたりと容易に分類ができ、目的に沿って話し合うことができました。



## (2) 6年生の授業とICTの活用

### ○授業 算数「比例と反比例」

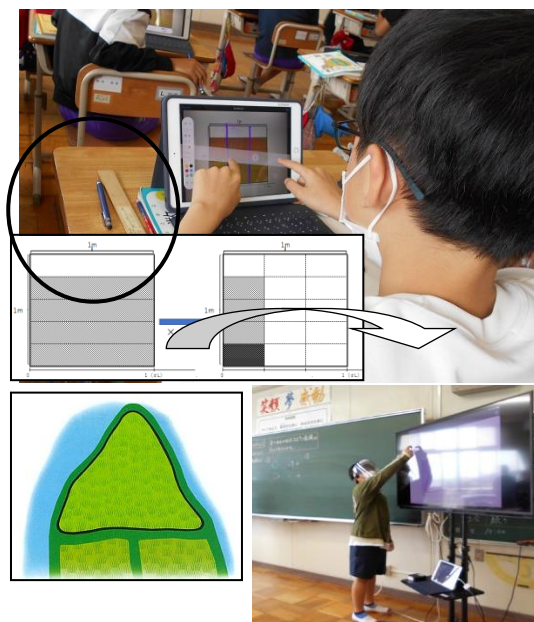
この授業では、比例の仕組みを使って値を求めるため、「2つの量」に着目した学習課題『2つの量の関係を調べ、値を求めよう。』というテーマを立てて始まりました。子供達が個人で考えた後、黒板に自分がどのくらいわかっているのか・悩んでいるのかをネームプレートで表しました(黒板右側)。すると、「急に数が大きいから・・・」と子供から困り感が出たので『どうしたら大きな数(重さ)のときの枚数を求められるのかな。』と学習問題を設定しました。子供の困り感から問題を設定したことで、子供たち全員で問題を共有し、話し合い活動につながりました。



### ○ICTの活用 算数「分数のかけ算」「円の面積」

右図の左側をclassroomに画像として載せて置くことで、子供1人1人がiPadを使って確認することができました。また、個で考える際に、タッチペン等を用いて自分の考えを積極的に書き込む姿がありました。

授業で問題を確認する際に、大型テレビに図を映して全体共有をしました。子供1人1人に配った図を大きく示し、クラス全員で問題や図の確認をしました。大型テレビを指しながら説明する友達の考えを、手元にある図と照らし合わせることで、考えをみんなで共有することができました。



## 3 来年度に向けて

令和3年度は、子供達が授業において問題や教材に関心をもち、ペアやグループ活動において積極的に友達と関わり合おうとする姿がたくさんありました。

令和4年度は、子供達が個で考えたいような学習問題の工夫に取り組み、自分の考えに自信をもてたり、根拠をもって友達に伝えたりすることができることを目指していきたいです。

## スーパーの秘密を探る ～コロナ禍での実践～

掛川市立大渚小学校 浅場 翔太郎

### ☆学区にスーパーのない大渚小

掛川市の南に位置する大渚小は、豊かな自然に囲まれており、いちごやメロンなどの農作物が有名である。そんな大渚小に通う30人の3年生がスーパーの秘密を探るために立ち上がった。

まずは、1週間の買い物調べを行った。学区にはスーパーマーケットやコンビニエンスストアなどの店はない。しかし、買い物にはスーパーを利用しているという家庭が圧倒的に多かった。子どもたちにとってスーパーは身近なものなのである。どうして学区にはないスーパーに行くのかと尋ねると、「安いから」「たくさん売っているから」という簡単な答えが返ってきた。お家の人と一緒に買い物に行く子も多かった。理由を聞いてみると、「お菓子を買ってもらうから」「楽しいから」ということで、店や働く人の工夫には目が向けられていないことが分かった。



### ☆校外学習の計画→コロナの影響でやむなく中止に…

どうして人々は買い物にスーパーを利用するのか、そして集客のための店の工夫を探るため、3年担任は、2学期に学区に近いスーパーLの社会科見学を計画していた。しかし、緊急事態宣言が出され、コロナウイルス感染拡大防止の観点から学級全体としてスーパーの見学に行くことはできなくなってしまった。子どもたちは見学に行くことを楽しみにしていた。子どもたちが実際に見たり聞いたり直接体験できなくても、スーパーの秘密を探ることができるように何とかしようと担任は意気込んだ。

まず、担任はスーパーに直接見学に行ったかのような映像を作成するべく動いた。実際に見学に行けなくても、ICTが進んだ今なら、教室で同じような体験ができるに違いないと思ったからだ。地元のスーパーに許可をいただき、店の様子を撮影した。実際に入り口から入り、買い物をする順路に沿って動画を撮影した。店長さんやスーパーの店員をしている保護者にも日頃気をつけていることをインタビューして音声を録音した。

さらに、お客さんの願いや工夫を知るために、地元に住む学校職員に買い物で気をつけていることをインタビューし、撮影した。そして、それらの映像を一人一台持っているiPadに保存した。



## ☆動画と写真が子どものやる気に火をつけた

スーパーの見学に行けなかったことを残念がっていた子どもたちだったが、身近なスーパーや人物が出てくる映像での授業ということでやる気が増していた。また、一人一人の iPad に写真や動画を保存することで、個人のペースで巻き戻したり繰り返し見たりすることができ、じっくりとスーパーに隠された秘密を探ることができた。



店の工夫を見つける際には、あらかじめ「値段」「商品の置き方」「品揃え」「便利さ」という視点で写真や動画を見た。

「特売の商品は、値札の文字の大きさが大きくて色も違うよ。」

「お惣菜を並べている人は、すごく早いな。」

見つけた工夫は視点ごとにジャムボードという iPad のアプリに小グループで書き込んだ。ジャムボードでは、友達の見付けた工夫も共有できるため、情報共有がスムーズにできた。

また、店を販売者側と消費者側の両面から見て考えることで、販売者側は消費者側の多様なニーズにこたえるように工夫していることに気付かせるようにした。そうしたことで、様々な視点や視野から考える力が子どもたちについてきた。毎時間、授業の終わりに分かったことや考えたことをノートに書かせたが、授業を重ねるごとに書く分量が多くなり、主体的な態度も見られるようになった。

そして、見つけた工夫を学級全体で共有していった。それぞれの工夫は独立しているのではなく、つながりがあり、お客さんに「もっと来てほしい」「たくさん買ってほしい」ためにやっていることに気付くことができた。

## ☆子どものやる気と学びの保証

「百聞は一見に如かず」とのことわざがあるように、社会科見学は実際に自分の目で見ることで理解や関心が深まり、学習効果が高い。しかし、コロナ禍で様々な活動が制限される中で同じように学習効果をもたせるために、今回は iPad を活用した。

その成果として、動画でも子どもたちの興味や関心は引き出せることが分かった。また、一回きりの社会科見学とは異なり、何度でも繰り返し見ることができるので、子どもたち自身で様々なことに気付くことができた。

今回 iPad 等を活用した映像体験でも学習効果があることが分かった。本校の研修テーマにある「根拠と理由を明確にする」ために、今後は実体験と学びのツールである iPad を併用し、より効果的な授業を行っていききたい。そして iPad のさらなる活用を試みていきたい。

# 学 び 合 い や り 抜 く 栄 中 生

掛川市立栄川中学校 高橋 達也

栄川中学校の学校教育目標「学び合い やり抜く 栄中生」の実現を目指し、本年度は学習・生徒会活動を2本の柱とし、自主・自立、共生・共協の力を育む教育活動に全職員で取り組んできました。ここでは、その一部分を紹介します。

## G S K ( 学 習 相 談 会 )

学習における生徒個々の悩み(困り感)はそれぞれです。生徒自らが自分の課題を把握し、自分に必要な学習や学習方法を探っていけるように、教師とのG S Kを年3回実施しました。相談したい教科の先生に「自分にはどんな勉強があっていますか?」「この勉強方法で大丈夫ですか?」「他に何かいい勉強は?」…生徒の疑問や悩みの声に各教科担当が答えていきました。全教員が全校生徒に授業で関わっているからできるこの方式は、栄中ならではの取り組みで、本年度は2・3年生において宿題(毎日取り組むべき家庭学習)をなくし、自分で学習内容を決めて取り組むようにしました。この1年を通して、与えられた課題を行う生徒から、調整しながら自分に今必要な学びをする生徒へと成長する姿が見られるようになってきました。次年度もG S Kに取り組み、『学び方を知り、実践する栄中生』を目指していきます。



## i P a d は 便 利 な ツ ー ル

昨年度末全員に配布されたi P a d。i P a dでできることは何か?始めはi P a dを使うことが目的になっていた職員も、研修や実践を重ねるごとに、どの場面で利用するのが効果的か少しずつ見えてきました。

社会科では、i P a dを使い、学習内容のまとめを個人やグループで一つのシートにしました。文字と写真を効率よくまとめることができ、以前のようなレポート形式より、分かりやすく内容の濃いものが完成しました。英語科では、アプリを活用し、録画した自分の発声や表情を確認したり、仲間と修正したりして、表現を高めることができました。音楽科では、1人1台を最大限に生かし、全生徒が創作に挑戦しました。

また、生徒会や委員会活動においては、これまで紙で行っていたアンケートを配信で行うことで集計も簡単にでき、活動に速やかに反映できるようになりました。

## 地域の魅力を発見・発信

3年生の総合的な学習の時間は「まちづくりや地域活性化」をテーマの一つとして取り組んでいます。今年には株式会社あらまほし、SAGISAGASTUDIOさんの協力を得て、動画作成に挑戦しました。動画作成が目的ではなく、動画を見た人が、「行ってみよう」「買ってみよう」と心を揺さぶられたり、自分でも地域のよさを再発見したりすることが目的です。

栄川地区は、旧東海道日坂宿や事任八幡宮、道の駅といった観光資源とお茶や栗ヶ岳などの自然に恵まれた地区のため、PRできる材料はたくさんあります。それらの題材を夏休みに取材し、2学期はVN（動画編集ソフト）でまとめていきました。中学生らしさが満載の完成した動画は、後日公開予定です。是非皆さん、視聴してください。



## 文章を読み取る力

学校生活で大切なこと、それは授業です。2年生国語「字のない葉書」では、作者の父に対する思いを、文章から読み取る学習を行いました。教科書に文字で書かれている部分から考えるだけでなく、文字にかかれていない部分（行間）を読み取って、主人公の父親の家族（私・妹）に対する心情の変化、愛情の深さを考えました。『戦時中、疎開に出た妹からの手紙が、葉書一面の大きな○から、小さな○や×になり、そして葉書が届かなくなる。その葉書を見た父の思いは…。』授業では、個人で考えるだけでなく、班の話し合いを通して、授業者が考えさせたい本時のねらいに近づいてくものとなりました。

日々の授業の積み重ねと各教科で得た学習が、新たな学びへと繋がっています。特に栄中の授業では「学び合い」が頻繁に行われています。学習は1人でもできますが、仲間と関わり合うことで、新たな考えにも触れ、理解も深まります。

中学卒業後、栄中生が社会に出て様々な困難に出会ったとき、本校で学んだ「学び合いの力」と「やり抜く力」をもってすれば、必ず立ち向かえるはずです。

栄川学園幼・小・中での学びが、中学卒業後の学びへ繋がるよう、これからも学校一丸となって取り組んでいきます。これからも御協力をお願いします。



# 天気予報士になって、天気予報！？

掛川市立東中学校 増田 有希

「あ～した天気にな～あれっ！」天気は生徒にとって身近な教材です。でも、理科の授業ですから、靴を飛ばして天気を見るわけにはいきません。生徒たちは、天気記号を覚える中で、全天の中に雲がある場合、どこからが曇りでどこからが晴れなのか、天気図を使って季節によって特徴的な天気になるのはなぜなのかを考えたりする学習をしてきました。風力や湿度などの気象データを観測や雲のでき方をペットボトルの実験で体験することもしました。このような学習の活用場面として、一人一台もっているタブレットを使い、実際の天気予報士のように天気予報を作ることにしました。

## 魅力ある問いの設定 ～説得力を得るために～

授業の最初に天気予報を見ることにしました。内容は一見合っているようですが低気圧の動きや前線に関わる気温、雲のでき方がめちゃくちゃです。これでは天気予報に説得力がありません。

それでは、どんな天気予報だったら、あなたは信じますか？生徒たちは学習班をつくり、どんな要素が必要なのか意見を出しあいます。「曖昧な表現がいけないのではないか。」「根拠となるデータや証拠となる写真が必要なのではないか」様々な意見を活発的に出し合って授業が進んでいきます。



## より説得力のある天気予報を目指して

いったんは結論が出たように思えた問題ですが、先生からもう一度切り返しが来ます。「本当にそれで信じられる？完璧な天気予報といえそうかな？」すると、生徒たちの心はグラグラと揺さぶられます。そこで、タブレットに追加資料が配られます。「1985年先生が生まれた年の天気予報と、2021年の天気予報の動画だよ。技術が発展することでいろいろとわかりやすくなっているけど、本当に大事な部分は変わってないはずだよ。比べて探してみよう。」

Classroomに資料が配られ、学習班で確認が進みます。タブレットで動画を確認しながら、意見交換を行い、出た考えはムーブノートで集約してカードにまとめていきます。次々にほかの班の意見も出てきて、より班の意見が深まってきました。全体の意見を比べていく中で、共通している部分や際だった意見がはっきりしてきました。

【1985年の天気予報】



【2021年の天気予報】



【ムーブノート】



「そうか！天気図にある気圧の情報や前線の様子を元にして、それぞれの予報を出しているんだ。」「それなら説得力をもたせるためには、天気図は絶対に必要だね。」「天気図から天気を予想して、わかりやすいように様々なデータで補っていたんだ。」どうやら結論が出たみたいです。

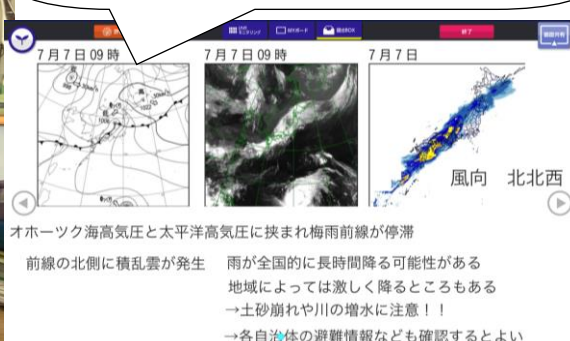
## 自分でやったからこそ「本物の知識」に ...

いよいよ自分たちで天気予報を作る授業になりました。インターネットの情報を駆使して、1人ひとりが自分だけの予報を作っていきます。今回は過去のデータからその季節の特徴がわかる天気図や、例年と違っていたりして面白いと感じた天気図を選んで良いことにしました。

熱海の土砂崩れが起きてしまった日を選ぶ生徒もいれば、地球温暖化の影響が疑われるものを選んだ生徒までさまざまな天気資料ができあがりました。それらの資料を使って、実際に仲間の前で天気予報をしていきます。はじめは緊張していた生徒も仲間に支えられ、生き生きと発表する姿がありました。撮った動画はエアドロップを使って先生の端末に送られます。自己評価カードには、発表を終えた満足感や興味を深めたことから生まれた疑問が書かれていました。



いろいろな気象データを活用して  
生徒が作った天気予報資料

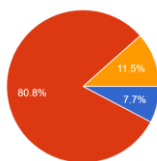


## 授業実践を通して・・・

理科の授業の中で、「わかった・できた」と実感できているか確認するために、アンケートを実施したところ、88%の生徒が「すべてまたは多くの授業で実感できている」と答えました。「あまり感じられない」と答える生徒はいませんでした。「わかった・できた」と感じられる授業を聞いてみると、黒板やワークシートを使ったわかりやすい説明という項目も高かったのですが、学習班での話し合いや相談、わからない問題を確認し合う時間にも達成感を感じているという結果が出ました。

理科の授業で、わかった・できたと感じることができましたか？

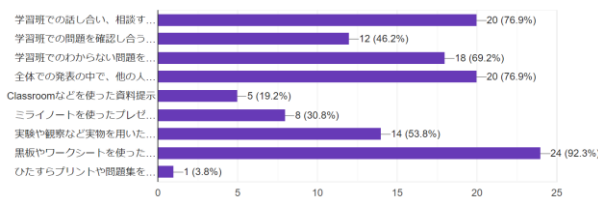
26件の回答



- すべてまたは多くの授業で「わかった・できた」と感じられた。
- いくつかの授業で「わかった・できた」と感じられた。
- あまり、「わかった・できた」と感じられたことはない。

「わかった・できた」と感じられた有効な授業はどれですか？複数回答可能

26件の回答

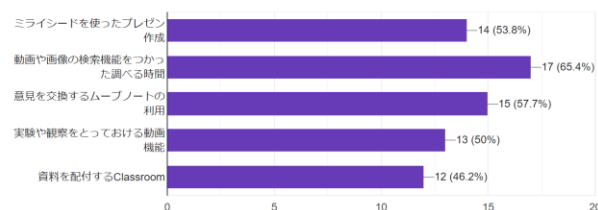


また、インターネットを使って情報を検索し、活用する活動や意見を交換し、クラス全体の様子を把握できるムーブノートの利用に効果を感じているという結果が得られました。

1人1台タブレットを有効的に活用することで、生徒の理解がより深まることから、タブレットの活用方法と場面設定、またそこへ向かう問いの工夫を引き続き研修していく必要があると考えています。

今年、タブレットを使った授業を行っています。学びが深まったと思うことや楽しく学ぶことができたのはどんな活動ですか？複数回答可

26件の回答



# 子どもが主役の授業 ～主体的に問題発見・解決していく力～

掛川市立西中学校 横井泰人

昔々あるところに、教師が50分間ひたすら“教え込み授業”を行っている学校がありました。

“子どもが主役として輝く学校”を合言葉とする西中学校では、その古い授業スタイルを撲滅すべく、“子どもが主役の授業”を目指してきました。



その具体的な取り組みとして、『問題発見・解決のためのひと工夫』『つぶやきを大切にした授業』『学習問題の明確化』を実践してきました。一緒に覗いてみましょう！

## 1 時間目：英語「iPadを使った発音のレベルアップ」 ～問題発見・解決のためのひと工夫～

英語科の授業では、「自分の発音に自信がない…」それでも、「発表したい!」「理解したい!」と、前向きに取り組む西中生に、とっておきの学習方法が紹介されていました。英語の教科書にQRコードが記載されており、それをタブレットで読み込むことで、教科書の本文を範読してくれる機能があったのです。ひと工夫として1人1台タブレットを有効に活用した授業が展開されていました。



さらに、音読テストの場面では、その様子を動画で撮影することで、自分を客観視してお手本と比較したり、友達にも見ってもらって評価してもらったりして、主体的で効率の良い学習をすることができました。生徒の感想からも、「自分がやりたいことを自分のペースで進められてよかった。」という前向きな声を聞くことができました。

## 2 時間目：理科「日本の火山の3D立体地図を作る」 ～つぶやきを大切に～

特別支援学級では、理科の時間に1人1台タブレットを活用されていました。前日の阿蘇山噴火で、火山への関心が高まっており、導入から多くのつぶやきがありました。生徒たちは、「日本の火山の3D立体地図を作ってみよう」という課題に対して、iPadで『地理院地図（電子国土Web）』にアクセスし、5つの火山の3D立体地図を作成しました。自作した立体地図を様々な角度から見たり、拡大・縮小したりして、火山の全体の形の特徴や、表面の凹凸の特徴に気付き、グループ分けしていました。「でこぼこしている」



「登るのが大変そう」「簡単に登れそう」など、自分自身の言葉で火山を分類できました。授業の最後には、導入のつぶやきに戻り、阿蘇山の3D立体図を作成して、どのグループに分類されるのかを考えられていました。

### 3 時間目：社会『わが県のために「豊予海峡ルート」を作るべきか？」 ～学習問題の明確化～

“生徒がいかに関心事として捉えることができるか”を追究した社会科の授業が行われていました。この授業では、単元を通して“もしも私が愛媛県議会議員だったら...”という設定で進められていました。『より良い』愛媛県のために「豊予海峡ルート」の建設の是非を考えるパフォーマンス課題に対して、生徒一人一人が既習事項を生かしながら、課題と向き合っていました。学習問題を関心事として考え、仲間と議論し、授業をつくり上げる姿は、まさに、子どもが主役の授業そのものでした。



### 4 時間目：理科『ウイルスを撃退！湿度を55%にするにはどうすれば？』 ～子どもが主役の授業～

4 時間目の理科では、日本を揺るがす課題と向き合っていました。「ウイルスの感染力が低下する湿度(55%)にするためにはどうすればいいのか」という問いに対し、既習事項を活用しながら、班の仲間と意見を出し合っていました。(【注】ウイルスの不活性化率が最も高い相対湿度が40～60%とされている(厚生労働省HP資料))



i P a d のアプリ『J a m b o a r d』を使って考えを書き込むことで、他の班の意見をリアルタイムで閲覧できるので、必要に応じて他の班の意見をヒントにしながら「なるほど」「そうか」と、考えを深めていました。そして、実際の湿度から『必要な水蒸気の量』を算出した後、確かめ実験として、その量の水を霧吹きで理科室に撒いていました。50分間、子どもが主役として輝き続けていました。

### 子どもが主役として輝く学校

いかがでしたか？あっという間に、西中学校の午前中の授業が終わってしまいました。

西中学校では、『主体的に問題発見・解決していく力の育成』を研修テーマとして、生徒が主役となって輝く授業を目指してきました。どの授業においても、生徒たちは“知りたい”“確かめたい”という意欲をもって参加し、主役として輝いていたと思います。

この後ある給食、創自(そうじ)の時間でも、生徒たちが主役として活動しています。授業のみならず、“子どもが主役として輝く学校”を合言葉に、委員会や行事においても、生徒が主役として輝いています。



# 学校教育目標の達成をめざすN I E教育

掛川市立桜が丘中学校 川中 瑞貴

## 目指す姿へ

本校が目指す姿は「大志を抱く（自分から取り組み、自分で考え、判断できる）生徒」「共生できる（他者の考えを認め、支え合う）生徒」「挑戦する（我慢強く最後までやり遂げ、言動に責任をもてる）生徒」である。また、令和2年度から日本新聞協会N I E実践指定校に選ばれたことで、N I E (Newspaper In Education) を用いた学校教育の研修を進めてきた。今年度は「生徒と社会をつなげ、学校教育目標（大志・共生・挑戦）の達成をめざすN I E教育」というテーマを掲げ、2年間の総括としてN I Eの実践発表会を行った。今回は、その様子を一部紹介する。

## N I E × 数学で生徒と社会をつなげる

新型コロナウイルスの新規感染者が爆発的に増加した令和3年夏。これまでにない急激な変化に国民は恐怖を感じていた。一体世の中はどうなってしまうのか。私たちの未来はどうなってしまうのか。この状況を打破し、未来への光を見つけるべく、桜が丘中学校2年生は、数学の単元「データの分析」の学習で、「箱ひげ図」を用いた静岡県内の状況分析及び、未来予測をすることにした。



まずは、過去のデータからの状況分析である。令和2年10月～令和3年9月までの静岡県内の新規感染者数のデータを用いて作成した箱ひげ図を見る。生徒は、これまでの学習を生かし、箱ひげ図の特徴からそれぞれの月の感染状況を分析していく。同じ増加でも、様々なパターンがあることがわかってきた。さらによく見ると、感染者数の変容にはある規則性があることを見つけた。また、増加と減少それぞれの要因は何だろうか。世の中の出来事に関係しているかもしれない。そこで、生徒たちは「静岡新聞データベースplus日経テレコン」から、過去の新聞記事を探り、世の中の出来事と感染状況との関連性を調査することにした。すると、「感染者数が増加した前の月に、GOTOキャンペーンが行われている。」「ワクチン接種が始まった時期がここだからその後で減少している。」「鬼滅の刃の映画公開の後から増加しているように見える。」「爆発的な増加が始まった7月末は、オリンピックが始まったタイミングと重なる。」など、新聞によって手に入れた情報から、生徒なりに新たな考えを導くことができた。数学的な根拠と社会的な根拠を組み合わせた深い分析である。





感染状況の実態を少し掴んだ生徒たちは、続いて今後の感染状況を予想してみることにした。「今後の感染者数はどのように変化していだろうか。」当初設定した課題から大きく飛躍した課題を、生徒たちが自ら設定した。「新聞を見ると、来月からGOTOキャンペーンが再開されるという情報がある。しかし、前回とは異なりワクチン接種が進んでいるという情報もある。ここまで分析結果で考えると、来月は30%程度増加することが予想される。」など、これまでの学習を生かした姿が多く見られた。果たして、予想は当たるのだろうか。これまでより少しだけ、世の中の出来事に目を向けて待つことにする。

この授業では「NIE×数学」で「生徒と社会がつながった学びの姿」を目指した。その学びから一人一人が未来を想像し、学校教育目標「大志・共生・挑戦」の精神で新たな未来を創造することができたのではないだろうか。

## N I E 教育の 2 年間の あゆみ

### 1年目：「情報を正しく読み、選択する能力の育成」

- ① N I E コーナー ⇒ 各学年の廊下に全7社分の新聞を設置。
- ② 桜が丘中新聞コーナー ⇒ 本校の活動を積極的に報道提供することで、自分たちが新聞記事になる。→ 新聞に興味を持つ。
- ③ 新聞から学ぼう ⇒ 新聞を用いた読解力向上学習を毎週木曜日に実施。
- ④ 授業における新聞の活用 ⇒ 全校道徳「コロナ差別をなくそう」。

### 2年目：「生徒と社会をつなげ、学校教育目標の達成をめざすNIE教育」

- ① 「全教科×NIE」の授業実践
  - ⇒ これまで主流であった「国語・社会・道徳・総合×NIE」という概念を超えた、「全教科×NIE」に挑戦した。
  - ⇒ これまでの実践例によくある「導入部分」や「トピック的な教材」での活用ではなく、生徒の「追究場面」での活用挑戦した。

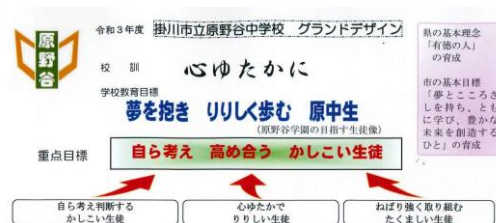


# かしこい原中学生を目指して

掛川市立原野谷中学校 池田 直茂

## 「かしこい」って何？

令和2年度末、原野谷中学校では来年度の新しい重点目標を決める話し合いが行われ、重点目標が「自ら考え 高め合う かしこい生徒」になりました。特に熱い議論が交わされたのが「かしこい原中生」とはどんな姿かでした。議論の結果、次の①②の姿を「かしこい原中生」の姿とすることにしました。



グランドデザインより

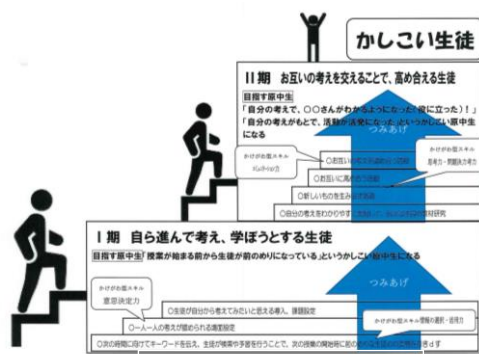
①自ら考えて行動できる

②生徒同士がお互いに高め合うことができる

この姿を目指して、令和3年度の教育課程や研修を計画し実践を行いました。

## 授業前に生徒が前のめりになっている

新しい重点目標のもとでの授業改善は、段階を踏んで行うことになりました。令和3年度は「①自ら考えて行動できる」に重点を置くこととし、「自ら進んで考え、学ぼうとする生徒」を研修テーマに設定しました。また、「授業が始まる前から前のめりになっている生徒」を具体的なめざす生徒像とし、生徒が主体的に「考えたい！」となるような授業を目指そうと考えました。そして1年間を通して、生徒の実態や教科の特性に合わせてさまざまな取組が行われました。



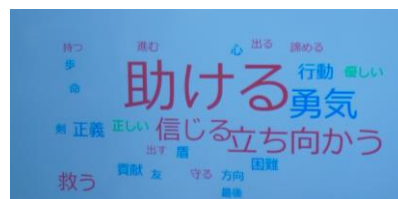
研修イメージ

### ・魅力的な次回予告

授業の終わりに魅力的な次回予告を行うことにより、生徒が次の時間への期待を高めたり、事前にインターネット等で調べたりして授業に臨みました。

### ・事前アンケート

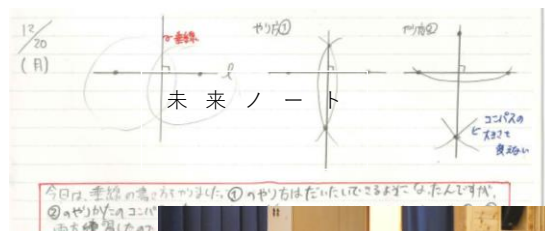
次の授業までの間にiPadを使ってアンケートを行い、そのアンケート結果を次の授業の



最初に提示することで、生徒が前のめりに授業に参加できました。

### ・未来ノート

次の時間に向けて「〇〇が楽しみだ！」と言えるものを行う取組です。です。生徒は自分で考えたり、調べたりするだけでなく、休み時間での生徒同士の会話でも何でもいいので、「〇〇が楽しみだ！」と言えることを準備して授業に臨みました。



## 生徒が主体となって

生徒が主体となった活動も「かしこい原中生」に向けての取組でした。近年は生徒会主体の行事などは減少していました。しかし、本校では生徒会を中心とした生徒主体の集会「清麗集会」を学期に1回行ったり、生徒会主催のイベント「原チャン」を実施したりするなど、生徒が考えて実践する活動を多く行いました。生徒が計画・準備・運営を行う機会を増やすことで、より主体的に考えて活動することができました。



清麗集会、原チャンのようす

## 来年度に向けて

来年度は、重点目標2年目となります。授業改善では「②生徒同士がお互いに高め合うことができる」の段階になり、生徒の対話などから新しいものを生み出したり、お互いの力を高め合ったりする授業展開を行っていきます。

また、原野谷中学校は生徒の手で改革した歴史があり、全国に先駆けて髪型の自由化の提案をしたり、落ち着いた学校にするために清麗の鐘を設置したりするなど、生徒会が中心となり、改革を行った活動が多くあります。来年度も生徒会を中心とした生徒の手でつくる原野谷中学校を実践していきます。



清麗の鐘

アンケートをテキスト

マイニング提示

## 「令和の遠州の小僧」が集まってくる北中の学び舎

掛川市立北中学校 浦海 佐也佳

むかしむかし、二宮尊徳のもとで報徳の教えを学んだ岡田良一郎さん。北中学区の倉見地区出身の岡田さんは、「遠州の小僧」「遠州小僧」と二宮尊徳さんからあだ名をつけられ、かわいがってもらった。尊徳さんの教えを引き継いだ岡田さんは、この地に「冀北学舎」を築く。

時は今、尊徳さんから岡田さん、岡田さんから地域へと受け継がれた精神がこの地には根強く残っている。冀北学舎が名を改め掛川北中学校になったわけではないが、この北中学校に「令和の遠州の小僧たち」が目を輝かせて、毎日登校してくる。

### 『学んだ知識は、世の中に役立つものでなくてはならない！』

この言葉は、尊徳さんから学んだ岡田さんが、心に刻み続けた言葉。これは令和の時代も同じ。学校の学びには、このことが根底になくてはならない。令和の遠州の小僧たちは、自分の得意な分野をさらに生かし、苦手な教科を克服し学びに励む。学校で学んだ知識は、地域のために利用する。地域のために生かす。いずれ、遠州の小僧は地域の主体者となるのである。

教える側の教員は、この単元や教材でどのような力を付けたいのか。この力をつけた生徒たちは、これを地域にどう返すのか。教員は、授業を展開してだけでなく、「生徒がどのように学ぶのか」を重視した授業の改革が求められている。

### 新たな改革「主発問」と便利ツール「ICT」

一休さんの中に「どちて坊や」が出てくる。一休さんに対して「どちてこうなるの？」「どちて？」と何度も質問する。一休さんですら悩まされるほど、質問する。辟易しながらも一休さんは、丁寧に質問に答えていく。好奇心や探究心旺盛な年頃なのだろう。

令和の遠州の小僧たちも「なんで？」「知りたいのに」「もっと学びたいなあ」「他の考え方をしてみたらどうだろう？」「どうして？」の疑問で頭がいっぱいであって欲しい。もしそうなったら教師も生き生きと丁寧に答えていく。そのためには、「なんでこうなるの？」と主体的に課題に取り組もうとする姿勢を新たに改革しなければならない。それが教師の大きな役目である。そのために今年度は、「主発問の工夫」に重点を置いて取り組むこととした。

この授業や単元で身に付けたい力を意識し、どのような流れとなればその力が身につくのだろうかと考え、授業展開をするために、主発問の工夫する。生徒の目線で、生活と結びついたもので主発問を考える。

その発問から、問題解決をしていく過程で、今年度から「ICT」が活用された。一休さんや尊徳さんの時代からしたら、驚くような便利ツールである。社会科の資料が、Air Dropで送られ、共有される。アンケート結果がその場でグラフとなり見られる。すぐに調べ学習ができる。動画を撮影することで、体育では自分の跳び箱のフォー



ムを、音楽では自分の歌う姿や音程の確認ができる。ICTを活用することで、問題解決をしたり、そこから新たな課題を見つけたりすることができる。

### 「令和の遠州の小僧」は自分たちで考え、そして幸せを貯金する

尊徳さんや岡田さんの時代から考えると、現在の世の中はとても便利である。きっと生活を便利にするために私たちは勉強をしている。しかし、便利さを追求しすぎたため、自然界や環境をないがしろにしてきてしまった一面がある。この先の未来ある地球のために、令和の遠州の小僧たちは、考える。生徒会活動の中で、「持続可能な開発目標」をそれぞれが考える。

地球で起こっていることが何なのか？私たちができることは何なのか？ICTを活用し、「SDGsの17の目標」の中から興味ある項目を選び、個人の取り組みとして、また北中生の取組として、何ができるのかを考える。



エコバックを持つ。ゴミの分別をする。エアコンの設定温度を1℃考える。リサイクルする。小さなことから実践していく。この取り組みが、私たちの未来の幸せを貯金している。自治活動＝生徒会活動は、今も昔も変わらず、地域や地球のために、取り組まれている。

### 偉大なる先輩から「諦めないこと。そして努力は報われる。」の教え

令和の遠州の小僧たちは、将来の夢はある生徒もいれば、いまだ目標のない生徒もいる。東京オリンピック2020のソフトボールで金メダリストの山崎早紀さんから、「あきらめないこと」「努力は必ず報われる」という講話をしてもらった。山崎さんの本校訪問の少し前、宇宙飛行士の講演でも同じように目標を達成するために努力した話を聞いた。世界1位。宇宙を見てきた人。そんな偉大な先輩からの直接のお話は、生徒たちの心に響いたものがある。山崎さんのようにスポーツで活躍することもあれば、宇宙やそのほかのことで今後、活躍することもあるだろう。どこに向かうであっても、身に着けた力は裏切らない。

生徒たちが努力していくだけでは、成果は上がらないし、結果はでない。まずは、教師側の意識改革や授業研修が大切な基盤となる。北中の教師たちは、それぞれが面白い個性をもっている。そして各教科のプロフェッショナルである。自分の教科だけを強化するのではなく、他教科の授業を参観するなかで学ぶことも多い。今年度は「教科別グループ研修」を行った。教科に関係なく、若者もベテランも関係なく、お互いの授業づくりから事後研修まで、活発な協議が行われた。主発問はあれでよかったのか？目標を達成するためによかったのか？評価規準が具体化されていたか？など視点を持ち、授業参観や検討をした。研修は、生徒のためでもあり教師たちのためでもある。教師も日々の努力を惜しまないでいこうと思う。約540人の生徒とともに成長して覚悟はできている。

「令和の遠州の小僧」も「令和の教師」も体育館のところから、岡田さんに常に見られている。岡田さんに恥じない学びを今後もしていく。そして次の世代に受け継いでいく。

# i P a d 活 用 物 語 ! ~城東中の学びを全国へ~

掛川市立城東中学校 研修推進委員会

## i P a d が や っ て き た ! で も 、 ど う 使 っ た ら い い の ? ?

昨年度末にiPadが生徒一人一台配付され、4月から本格的に活用していくことになりました。しかし、生徒も教師もiPadをどう使えば良いのかわからない!!

「iPadで何が出来るの?」「どう使ったらいいの?」よく分からない状態でした。試しにカメラ機能で、写真を撮影してみるなど、生徒も教師も簡単な使い方しかできませんでした・・・

## 授 業 で i P a d を 使 っ て み よ う !

5月になり、少しずつ授業でiPadを活用する場面が増えてきました。例えば、1年生の社会科の授業では、共同編集できる「jamboard」というソフトを使って、意見交換したり、意見を分類したりする活動を行いました。授業でiPadをもっと活用できるように、夏休み期間中に、講師を招いてGoogle Workspaceの使い方について、教職員研修を行いました。この研修をふまえて、2年生の理科の授業では、動画撮影をした実験を繰り返し見て考えをもてるようにしたり、プレゼンテーションソフトを活用して小集団の意見をまとめて発表したりする活動を行いました。

また、感染症拡大などによる休校に備えて、オンライン模擬授業を行いました。給食後、全校生徒を帰宅させて完全リモート授業を学年ごとに行いました。



## 防 災 学 習 で も 活 用 !

3年生は、防災学習の中でiPadを活用しました。iPadは、「共有できる」「保存できる」「持ち運べる」という点で、防災学習では大活躍しました。

防災学習の動機付けとして防災クイズアプリを一人ひとりの端末にダウンロードをしました。このアプリは、11月に行った小学生との防





災交流会での会話のツールとしても活躍しました。また、D I G学習では、自分の地域の防災施設を回り写真撮影しました。その後、事後学習では、必要な写真を選び、仲間と共有することができました。1学期に使った資料が、2学期に別の場面でも資料として活用できたこと、言葉だけではなく、実物として示せたことが大きな財産になりました。

## オンラインで生徒総会！

授業以外に、生徒会活動でもiPadを活用しました。

iPadのzoomアプリを使い、生徒総会をオンラインで行いました。

生徒会本部役員や専門委員長がいる図書室と各教室をzoomでつなぎ、後期の活動計画を全校生徒に伝えました。全校生徒から各委員会への質疑応答も画面越しに行いました。途中、zoomをつなぎ直さなくてはいけなくなるなどハプニングもありましたが、無事承認を得ることができました。



## そして全国へ発信！

iPadが来た当初と比べると、様々な分野でiPadを活用できるようになりました。

学習面では、学校の授業で学習した内容を、家庭でiPadを使って自分で調べて、興味・関心や理解を深めたり、更に深い知識を得たりしました。また、英文の音読や合唱の歌声をiPadに録音して記録を蓄積し、単元の初めと終わりなどで聞き比べて、上達したことを生徒が実感できるように工夫して活用しました。

生徒会活動では、全国にある「城東中」とオンラインでつながり、令和4年2月28日に「第1回全国城東中サミット」を開催します。本校が総合司会を行って、今回のテーマである「学校紹介&地域自慢」について話し合います。「城東中サミット」を通して、全国へ本校や城東地域の良いところを発信したいと思います。



## 細胞による呼吸 ～意見を練り合う姿を目指して～

掛川市立大浜中学校 池谷貴弘

私たちは普段の生活の中で当たり前のように呼吸をしたり、食事をとったりしている。これらのことについて、体の中でどのような器官が、どのように作用しているのかを深く考えたことはほとんどない。この授業では生物の観察や実験を通して、体のつくりと働きを理解し、それらが関わり合って生命の維持ができていているという総合的なものの見方を身に付けることを目的とした。

### キャラメルひとつぶ300メートル！？

「キャラメル一粒を食べたらどのくらい体を動かせるかな？」生徒への問いかけに「全然動かない」「お腹がすく」という反応が返ってくる。「ひとつぶ300メートル」でおなじみのキャラメルパッケージを提示すると驚く生徒たち。実際にはキャラメルを消化すると300メートルを走りきるだけのエネルギーを得ることができる。小さなおやつでどうやって体を動かすのだろうか？

食べたものがどうやって体に取り込まれ、エネルギーになっているのかを呼吸・食事・細胞による化学反応という観点から考える。これらの活動と器官については学んでいるためそれが相互に関わり合うことで生命を維持するためや活動のエネルギーの獲得につながっていることに着目する。

### 「それってどういうこと？」

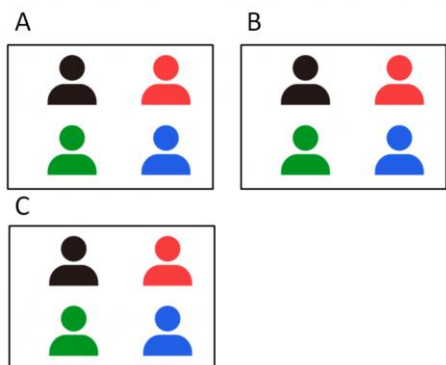
学習が始まると、学習班から一人ずつ、それぞれA～Cの別のグループに分かれていく。図のように全ての班から同じ課題を解決するをグループとして集める。

『A 車はどうやって動いているのか？』『B 植物は生きるための物質をどのように得ているのか？』『C 動物はどのような物質を体内に取り込んでいたか？』それぞれのグループごとに違う課題に挑戦してもらい、ここでの課題解決が『キャラメルが体内に取り込まれてエネルギーになるまで』の大きな課題を解決するために必要な学習内容の一部となっている。つまり各グループでは途中までしか解けず、中途半端な状態で班に戻ってくる。そのため班に戻ってくると「それってどういうこと？」「こっちのグループでは…」とあちこちでお互いに聞き合う姿が見られる。

大きな課題を解決するためには、それぞれの学習内容を班内で発表し、プレゼンテーションやコミュニケーションを取り合って、意見のすり合わせを行うなど協力しながらアウトプットをしていく必要がある。そのため生徒たちは主体的、協働的に学習を進めることができる。まとめにはミーティングボードを用いて全員が参加



できるように行っている。授業の最後には協力して考えた意見が図や説明によって書かれている。



### 「生きる」って忙しい…

「呼吸と食事を取り込んだ酸素と有機物を反応させて細胞では熱エネルギーをとりだして体を動かしている。」課題を解決するには3時間以上を必要とした。「呼吸」と「食事」から「熱を取り出す」という学びを自分たちで解決したときにつぶやかれた言葉は「生きるって忙しいんだな。」普段何気なく行っている活動に対してそれらが相互に関わり合うことで一つの目的を達成しているという生命活動への理解が進んだことから生まれた言葉だった。

### まとめに ICT を活用する

授業のまとめにiPadを用いた。話し合いの中で個人がどれほどの理解をしているかを振り返るために理科では単元ごとにまとめの課題を設定しているが、今回は班のまとめはミーティングボードを活用し、協働学習としての意見を各自のiPadに画像として保存し蓄積した。また、個人ではskyアプリを用いてレポート形式でのまとめを行った。一人一人の習熟度について授業者が把握することで次の授業への活用が可能となる。また生徒は単元を通して学んだことを最大限に活用することができた。

## 「コロナ禍だからできること」「コロナ禍だけでできること」

掛川市立大須賀中学校 森下 尚

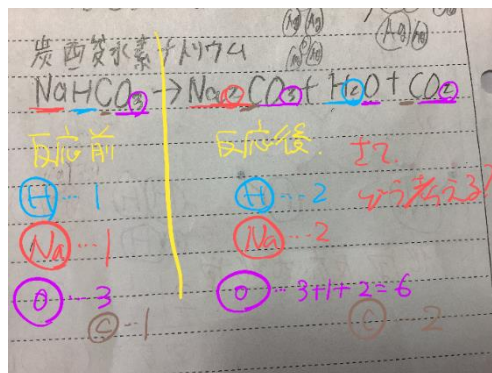
### 活動制限

「追究したい問いに対し、主体的に深く学ぶことができる生徒」を目指して、本校では教室内の机の配置をコの字型にしたり、意図的に会話活動を行ってその力を高めるコミュニケーション活動を朝活動として週一回継続的に行ったりしてきました。また、授業においては、生徒自らが解決したいと思うような問い（課題）を設定し、3～4人グループで解決していくような授業形態「おおすか型学び合い」を示して実践してきました。

しかし、新型コロナウイルスが広まり、学校が一斉休校を行った令和2年3月以降、感染症拡大予防の観点から多くの教育活動が制限されるようになりました。本校でも、コの字型に配列された普通教室の机を前向きに戻したり、感染状況に応じて特別教室の使用制限やグループ活動の制限なども行ったりしてきました。

### コロナ禍だからできること「タブレットを用いた個別学習」

生徒間の接触を控えるために、昨年度末に導入されたタブレットを用いて、生徒がワークシート（紙）へ記入した自分の考えをカメラで撮影して教師へ提出、教師はタブレット上で採点、加筆して生徒へ返却をしました。1クラス約30人分の課題を採点、返却するのは時間的に厳しいものがありましたが、細かく指導ができたと思います。



### コロナ禍だけでできること①「授業形態の工夫」

昨年度、生徒全員分の飛沫拡散防止用のシールドを購入して、グループごとの会話的活動を行えるようにしました。そこに大型ホワイトボードを加えることで、生徒間の距離を保ちつつ個人の考えを可視化し、視覚的にサポートしたり、会話的活動がより深まるように工夫したりしました。この方法を用いることで、コロナ禍前と同様に課題に対して生徒自らが答えを追究する姿がみられました。



## コロナ禍だけどころできること②「タブレットの活用」

グーグルのジャムボードは、オンライン上で1つのファイルを20名が同時編集可能なデジタルホワイトボードです。これを用いることで、生徒間の距離を保ちつつ意見を集約することができます。



1年生理科「動物の分類」の学習では、事前にジャムボードに動物の写真を貼ったものを用意し、その写真を移動させ特徴ごとに分類する活動を行いました。普通のホワイトボード上で写真を動かして分類するのと同様に授業が展開できました。

同じく1年生理科の「動物の分類」の学習で、「カモノハシ」、「ジンベイザメ」、「ハイギョ」について個々に調べ「異なる種類の特徴をもつセキツイ動物が存在するのはなぜだろう」という問いに対して考える活動（ジグソー学習）を行いました。この時には、学習問題に向かう前に機器の操作に時間がかかり、意見を深めることができませんでした。

ジャムボード導入初期には、データを入力するのに時間がかかったり、間違えてデータを消去してしまったりと、タブレットを操作する過程でのトラブルがみられました。そのようなトライ&エラーを繰り返しながら、タブレットの効果的な利用方法を模索していきました。

## 疑問や課題を生徒全員で追究していく集団づくり

これらの活動の効果を計るために、新型コロナウイルスの感染が広まる前の平成31年度2学期の授業アンケートと令和3年度1・2学期の授業アンケートとの比較を行いました。その結果、「友だちとの対話が自分の考えをもったり、その考えを発展させたりするのに役立った」という項目については「よく当てはまる」「やや当てはまる」と肯定的に捉える生徒の割合が、平成31年度2学期が100%だったのに対して、令和3年度1学期が95%、2学期が97%小幅な変動に収まりました。

大須賀中学校では、授業、生活、行事等を通して、生徒同士がお互いにコミュニケーションを取り合い、「分からない」「教えて」と聴き合える環境づくりを意識しています。そして、学習の得意な生徒も苦手な生徒も全員が授業に参加し、「学び合う」学習集団づくりを目指していきます。